圖式琵琶歌

特
174
101

始

特100
11.

緒言

悲愴淋漓、而も勇壯にして、懦夫をしも起たしむるものは、それ琵琶歌なるか、明月皎々、中天に沖い、秋風落莫、四顧萬條、獨り琵琶を彈奏せば、百感交々、胸に迫り來りて、其の心情、果して如何ぞや、余、少時よりこれを好み、學修の餘暇、これを彈奏せざるはなし而も其の歌詞は、多く古來より傳はるところのものにして、人多く知らざるはなからん、然れども、これを絃に合すときは

大正
3. 5. 1.
内交

其の句調の動もすれば、絃に適はざる所あり、今本書載する所のものは、多少これを修訂して、音調に適はしめたるもの少なからず。若し夫れ、學修の餘暇、之を彈奏するときは、假令明月に對せざるも、古英雄の偉を偲ぶもの、蓋し此の右に出づるものなからん歟。

か所感を述べて、卷首に掲ぐ

大正三年の彌生の初、月明かなる夜、礫川の軒傾き、月漏るゝ陋屋にしるす

清嵐道人

圖式琵琶歌目次

▲彈奏者心得……一
▲圖式正譜……九
【一】千代の春……一六
【二】蓬萊山……一七
【三】常陸丸……一八
【四】戰後の月……二二
【五】國船……二三

【六】臺灣入……二四
【七】川中島……二八
【八】小敦盛……「初段」……三三
【九】小敦盛……「二段」……三九
【一〇】兒島高德……四八
【一一】扇の的……五一
【一二】譽れの駒……六一
【一三】形見の櫻……七八
【一四】花の香……九五

【一五】遠矢……九七
【一六】若武者……一〇三
【一七】千早振……一〇四
【一八】靖國社……一〇六
【一九】廣瀨中佐……一〇七
【二〇】月下の陣……一一〇
【二一】水雷艇……一一二
【二二】梶村候補生……一一三
【二三】勇敢なる水兵……一一五

【二四】山櫻……一一六
【二五】螢雪……一一八
【二六】笠置山……一一九
【二七】七卿落……一二五
【二八】高德題櫻……一二六
【二九】月華……一二八
【三〇】春日野……一三一
【三一】梅が枝……一三二
【三二】武藏野……一三四

【三三】迷悟もどき……一三六
【三四】蟾蜍……一三七
【三五】老蘇の森……一三九
【三六】大楠公……一四一
【三七】大楠公「二段」……一四六
【三八】島原合戰……一五〇
【三九】櫻井の驛……一八六
【四〇】金剛石「御製」……一八七
【四一】別れの國歌……一八八

【四二】毒饅頭……一九一
【四三】白虎隊……一九五
【四四】石童丸……二〇〇

圖式琵琶歌目次【終】

圖式琵琶歌

彈奏者の心得

高橋清嵐編

凡そ琵琶歌なるものは、其の由來するところ古く、其の歌詞のごときも、古來傳ふるもの少なからずして、いづれも皆悲壯にして、其の眞意を解すれば、落涙滂沱として、襟を潤すを覺えざるもの、比々みな然らざるはなかりき。

されば、琵琶は、如何にして彈奏するや、歌調は、如何にして、之れをうたふべきや。是等は、漸次熟練を待つにあらざれば、能はざるべしといへども、今初めて彈奏せんとする諸子のために、いさゝか其の心得ともなるべきものを說かんとす。

一　先づ、歌詞の意味を了解することこそ良からめ。其の歌詞の意味にして、これを了解するときは、自から其の歌調をも知ることを得べからん。

二　琵琶歌には、三絃、琴等に於けるがごとき一定の節あらず。されば、彈奏者に於いて、之れを研究するにあるのみ。故に、古來名手

と呼ばれし人も、其の時と場合によりては、多少の變節なしと云ふべからず。されど、必ずしも爾なりとは、斷ずべからず。一の標準とも見るべきものなくして止まんや。是れ本書が、之れを言はんとする所のものなり。今先づ本書に使用したる符號より之を示さん。

、　大干　彈奏者の最も高き音聲を發して、うたふ所の符號なり。されど、中には、隨分長き文句もありて、絕對に高音のみにて、うたふべしとのことにはあらず。其の中につきても、高音ながらも、自から抑揚を附することゝなさゝるべからず。

○ 中干　大干と地聲との中間に位する音にして、其の結句に、節を用ふるものとす。

● 切り　是は、文章の段落なり。こゝに至るときは、順次大聲より低聲に移り、其の語尾は、これを張り上ぐることゝなすべし。

△ 崩れ　此の部分に至るときは、調子は、少しく之を早めざるべからず。宜しく緩急の度に注意すべし。

▲ 吟替　此の部分に至るときは、其の歌調は、極めて悲哀を用ふべきものとす。

。」句切　此の部分に至れば、音聲を止むべく、且つ最も明瞭に切るべきものとす。

三、以上のごとく、本書には、歌詞の右側に之れが符號を付したればこれに依りて以て、其の音譜を解することを得べしといへども、如何なる聲音が、大干に適ずべきや。如何なる聲音が、中干又は崩れに活用し得べきやは、恐らくは、各人の迷ふところなるべしと思はるれば、これが一斑を述べんに、凡そ人々其の聲音の相異なるものにして、決して同聲音の人は、あらざるべけれども、普通の音、即ち俗に所謂地聲なるものは、高からず、低からずして、其の中を得

たるものなることは、何人も、みな相同じかるべし。畢竟其の聲音の千態萬狀なるべきのみ。而して本書に譜の付けざる部分は、即ち是なりとす。

四、大干は、如何なる程度まで高くするや、中干は、如何、崩れは如何、今了解し易からしめんがために、左に之れを圖解し、歌調を擧げて、其の一斑を知らしめんとす。他は宜しく類推せらるべし。

01																	
9																	
8																	
7								10									
6								9									
								8									
								7									
								6									
								5									
								4									
								3									
								2									
								1									
								中	5	4	3	2	1	高	01	9	8	7	6	5	4	3	2	1	低

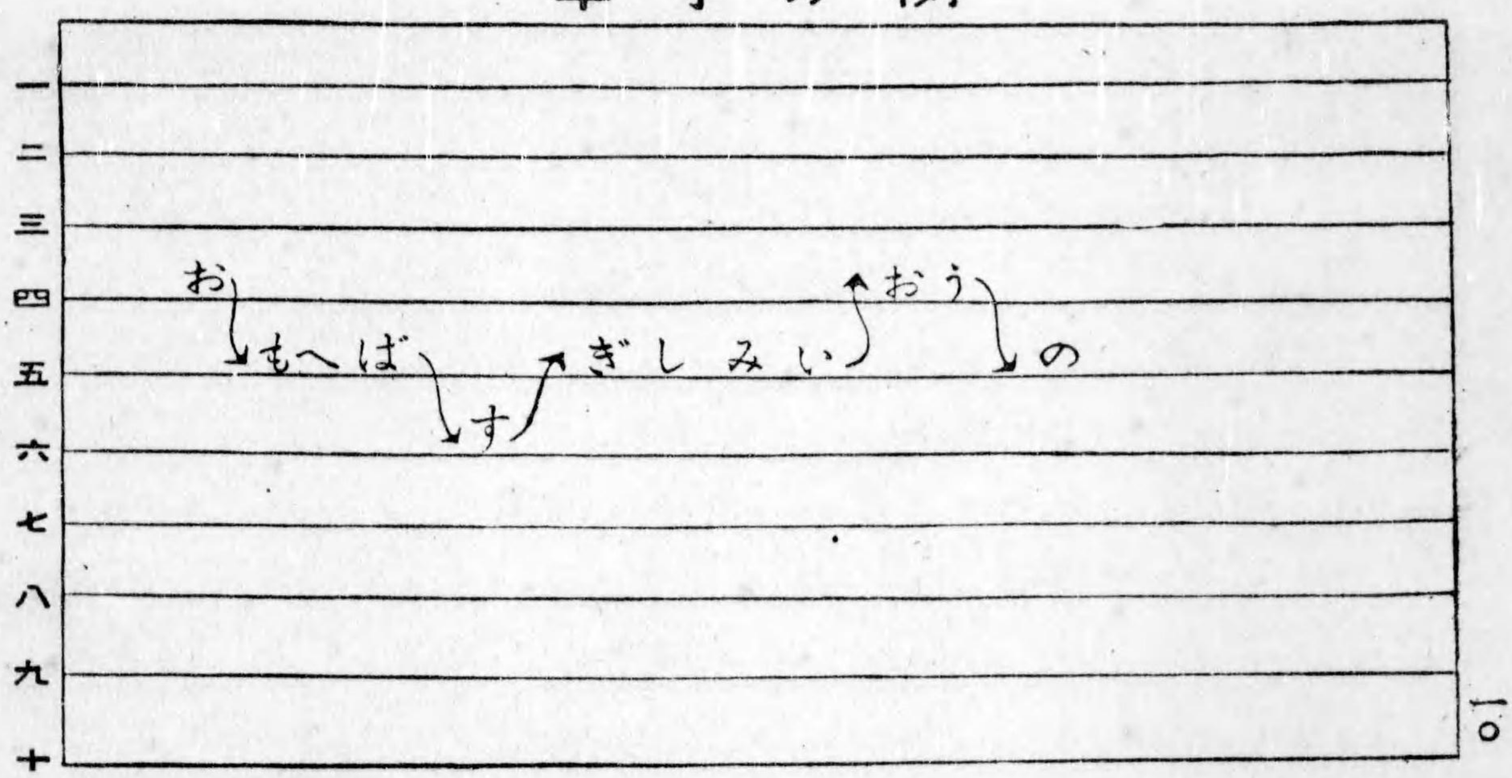
以上示すところのものは、假りに音階を十階に區別したるものにして高、中、低の三種を掲ぐ。高は、最も高く、中は、これに次ぎ、低は又これに亜ぐ。今これを比較するに、中音と低音とは、其の差、著るしからずといへども、高音は、最高の音なれば、他の二音に比して最も高きものなれば、其の懸隔は、甚だしかるべし。されば右のごとく人によりて、其の地聲に高低の別あるものなれば、甲の中音も、乙にては、高音となるべく、又丙にては、高音となることなきにあらずといへども、之れを要するに、其の高音と云へるは、其の人の高音と思はるゝ程度に於いてして可なり。故に、等しく大干に歌ふといへども

或ひは他の人にては、中干のごとくに聞ゆべけれども、是は、各自特有の聲音なれば、敢て彼是云ふほどのものにてはなからんか。

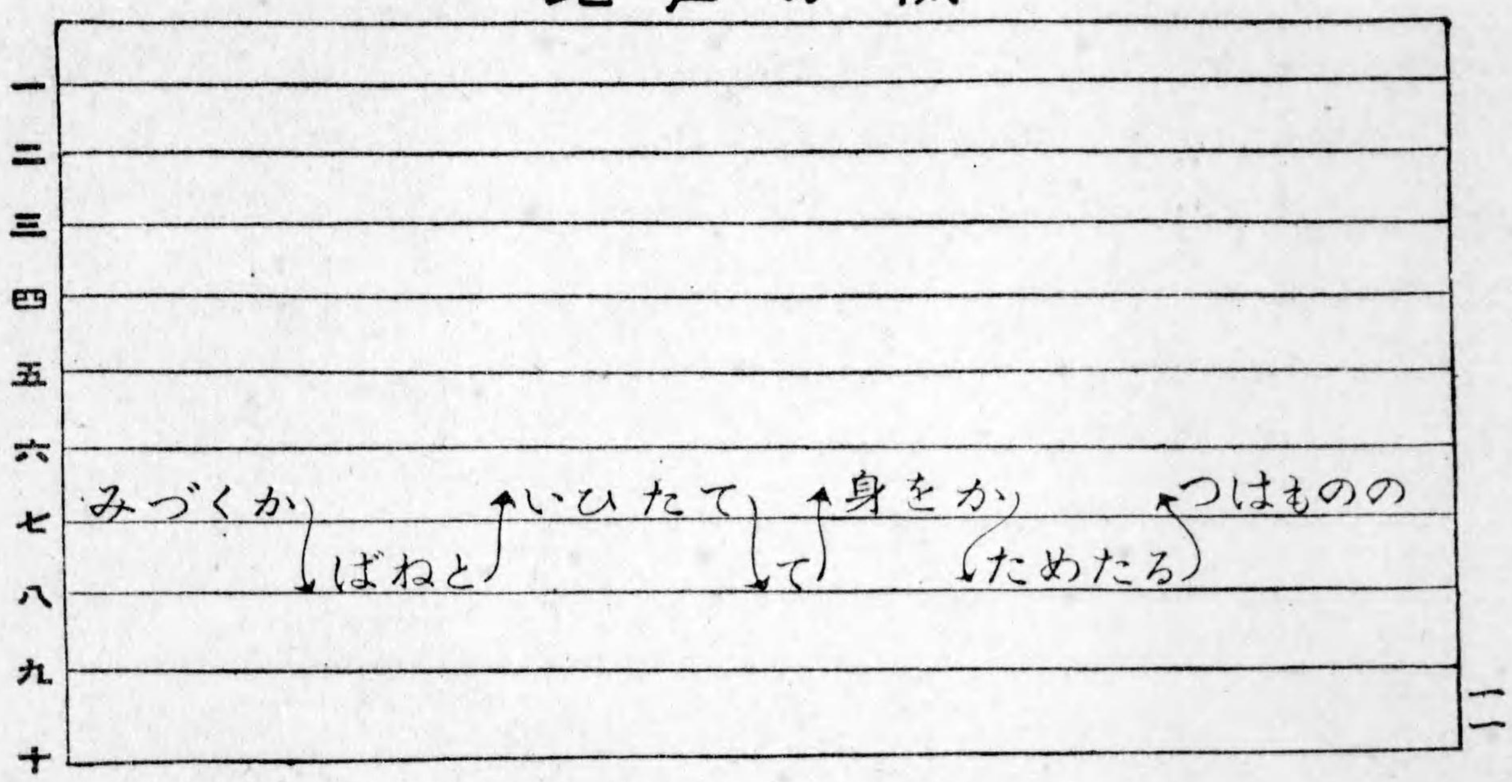
木干の例

一 のやまの
二 くらま
三 やまびし
四 ひに
五 ひび
六 き
七 よめく
八 ど
九 大砲の
十

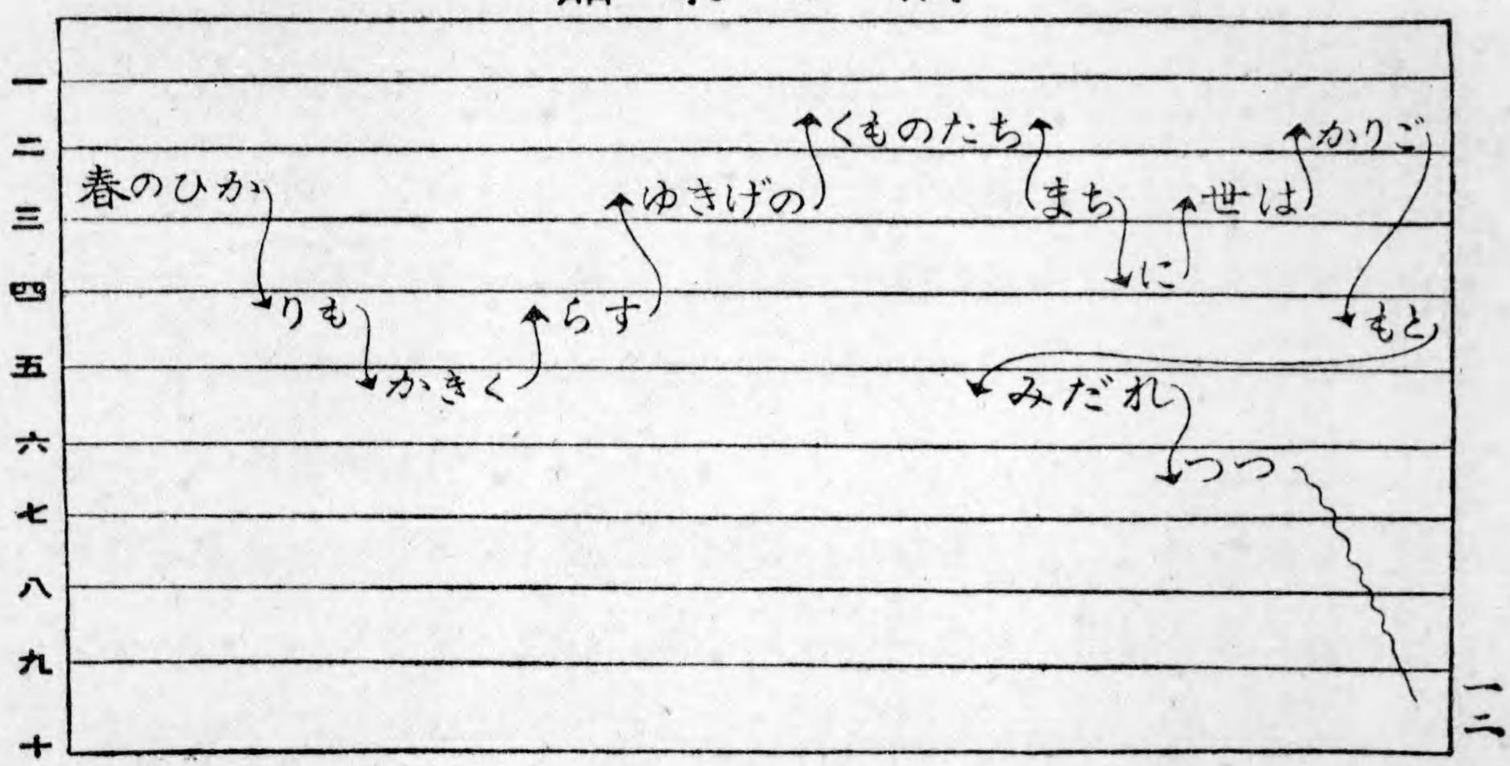
中子の例



地声の例



崩れの例



如上の(1)乃至(10)を以て、先づ音階となし(1)より(4)までの地聲に、(4)より(7)までを中干に、(7)より(10)までを大干に充てたりといへども、琵琶は、決して斯くのごとく、音階の僅少なるものにあらずして、極めて多きも、到底筆につくし難し。故に、了解しやすからしめんがために斯くは、假定したるものなれば、讀者諸氏は、宜しく其の心して見られんことを望むになん。

琵琶の彈奏者に就きて、面白き談話こそあれ。いでや、心得の一端にもやとて、こゝに掲げんに、昔、天德寺了伯は、武將の譽の高き人にてありき。一日徒然を慰めんとて、家臣をして琵琶法師を招きて、一

曲を語らせんとて、曰く、何にあれ、悲しきものを聞かせよ、と法師畏まりぬとて、初めには、宇治川先登を語り、次で那須の與市宗高扇の的を語りけるに、了伯は、始終頭を垂れ兩手を膝に置きて、落涙滂沱として謹聽しけるが、終りて厚く法師を犒ひ歸らしめぬ。時に二三の近侍も、陪聽なしてけりとぞ。

後、數日を絶て、近侍のもの、了伯に向ひ、過ぐる日の法師の琵琶歌を聞きたまひしとき、御涙を流されしは、そも、何故ぞやと問ひけるが、了伯は、人々にむかひて、御身等は、悲しからざりしかと尋ねたるに、近侍の人々は、悲しきことなし、唯、勇壯にして如何にもいさましき限りなりきと答へければ、了伯、襟を正して云はるゝには、我れも、此の日頃まで、御身等を肱股とたのみ居たりけるが、さて〳〵、頼もしからぬことゞもを聞くかな。よく〳〵思ひ見よ。宇治川の戰に若し佐々木高綱が、先登すること能はざりしならんには、頼朝よりたまはりし名馬に對しても、武士の名折、此の上やあるべからず。又那須の與市の心事を見るに、八島にて、もし扇の的を射損じなば、敵味方環視の下にあれば、腹搔き切りても、果てずには濟まされまじ。されば、此の兩人の心事を察するときは、勇ましといはんよりは、寧ろ悲しかるべく、如何ばかり心を痛めたりしや、これを思へば、泣かざ

らんとするも、涙の自から禁めもあへぬこそことはりなれ。御身等も我れに仕へん身にしあらば、よく〳〵是等の心を酌みて、其の心事を思ひ見るべしとて、諄々と説き諭したりしかば、近侍の人々も、實にもと悟りたりしとなん。いと面白き談ならずや。

一六

一、千代の春

斯る目出度き御代なれば、國々諸所に至るまで千代の春千歳の秋と樂しむも、皆これ君のめぐみ深き故ぞとて、いよ〳〵君を仰ぎ奉る、思ひ〳〵の殿作り甍を並べ軒をつらね、高殿樓閣に構へつゝ朝日のひかり月のかげ、うつる光のかゝやくもおろかに思はれて、庭には金銀の砂石をしき四方のかゝみもおびたゝし。不老門を出入る人の袖をつらねて色めくは、これぞ名におふ花衣喜見城の都の春もかくやあらん。かほど治まる御代なれば、雨風あるも枝をならさじと云へば、又人として君が此の代を千代萬代までもと祈らぬ者こそなかりけり。

二、蓬萊山

目出度やな君がめぐみは久方の、光りのどけき春の日に不老門を立出で、四方の景色を眺むれば、峯の小松に鶴すみて谷の小川に龜遊

ぶ。千代や八千代にさいれ石の、岩ほとなりて苔のむすまでと命ながらへ、雨土くれを破らじ風枝をならさじといへば又堯舜の御代もかくあらん。かほど治まる御代なれば千草萬木五穀成就して、上には金殿樓閣のいらかをならべ、下には民のかまどを厚くして仁義正しき御代なれば、蓬萊山とは之れとかや、君が代の千歳の松も常盤色替らぬ御代のためしには、天長地久と國も豊かに治まりて弓は袋に劍は箱に納めおく、諫鼓苔深うして鳥も中々おどろく樣ぞなし。

三、常陸丸

征露の軍やう〳〵に進み〳〵て南山の險阻も既に打ち破り音に聞えし要害の旅順口も閉塞されて鷲の棲むてふ滿洲も、君が稜威の旗風に今は靡かぬ草もなし。心筑紫の島放れ玄海灘のたゞ中に、吹く朝風に日の丸の旗を翻へす常陸丸佐渡も續ひて進みゆく、船路はなれて白浪の寄るべは如何に遠からず、何ぞあらぶる荒潮の逆捲く中に黑煙は只ひとすじに走り來て、われを取りまく敵のふねこは何事といふ間もなく、亂射亂擊雨霰れ遁れんまもなく、千里を走る猛獸も水に入りては如何せむ萬里を翔る大鵬も水には翼折れぬべし。心ばかりは早やれども運送船のかなしさは進退茲にきはまつて、詮方なくも敵艦に任せはてし

ぞ是非はなし、佐渡は如何にとながむれば、霧にまかれてわかねども同じ樣なる運の末、輸送指揮官須知中佐これまでなりと思ひけん、大久保少尉の捧げたる聯隊旗をば手に轉じ、都の方をふしをがみ火を放ちて燒きければ、各々將士はそれ〳〵に貴重なる品を燒き捨てぬ。此の有樣を打ち見つゝ中佐は軍刀手に握り無念の涙はら〳〵と、落つるを袖に打ち拂ひ萬歳唱へ悠々と、腹かき切てぞうせにける。連なる將校始めとし下士卒に至るまで同じ枕に伏せにけり。海に投じて死すもあり、敵彈益す加ふれば、甲板上はたちまちに屍の山を築きつゝ、血汐を玄海の波にあざれて染みにける、哀れなるかな常陸丸君萬歳の

聲細く日は六月十五日、夕日の波にちらされてあやめもわかぬばかりなり、實に誠忠のつはものが、十年の間朝夕に、磨きたゝえし日本刀精氣こもれる切れあぢを、試さむ敵を前に見て遺恨の刄ひと大刀に酬ひん事もなしけり、駒のひづめに滿洲を蹈みにじまぬも無念なれ、ウラル山を越えしあらまし事も幻か、思へば無念の極りなり、あゝ一聯隊の我が勇士、水漬屍は消えしかど、國に盡せしますらをの、清き其の名は世々に譽き灘に立つ波の絶ゆる時なく仰がれて、末まで遠く流るらむ。

四、戰後の月

夜もふけゆきて鐘こふる草はむ風はおと高く月の光りの影さむし、ひいき渡りし砲の音も、靜まりはて、今はしも、霧立ちこめし水の面に、友をはなれし川千鳥、聲ぞ身にしむ鴨綠江のほとりの松におく露は、梢つたふてひた〳〵と、まさごの中にまろびいる、大御心を身にしめて、敵をねらひし砲先の、なげきは今の我に受け、吹きくる風に打ちなびく野邊の草むら枕して、葉末にあへぐ螢火かてがらも立てずうたかたの、消えゆく身こそ悲しけれ、いよ〳〵眠る萬象に寂しさいとい

增すかゞみ、何故天はすみつるぞ何故つちはたゝかふで、天の心は地になきか澄むとはよその名のみにて、血汐にしぼる月魄におぼろの姿かすませて澄めるは天の姿なり。さわぐは地のすがたなり。聲する方をながむれば銀盤瑠璃の月白く、下界の塵を吹く風にこの世のあかを洗ふ音、ありな九河の瀨は高し。

五、國船

雲に聳えし高山も登らばなどか越えざらん、空を浸せる海原も渡らば遂に渡るべし、我が秋津洲は茜さす東の極み離れ島、例へば海の只だ

中に浮べる舟にさも似たり、二萬方里の船の中四千餘萬の乘組あり、船の主の指揮を受け、文明海に進み行く、水師、揖取、多かるも我れらも舟子の一人なり、船のゆくては和田の原、八重の汐路のとほければ、颶風さかまく時もあり、高浪あるゝをりも有り舟子の術をならはずば、はやて高浪しのぎ得て、思ふ港にいかで着くべき。

六、臺灣入

皇の御稜威は四方に輝きて、清國遂に和議を乞ひ、臺灣島を献納し、合戰茲に治まれる君が御代こそ目出度けれ、臺灣島の土賊等、龍車に

向ふ蟷螂の、斧を振ふと聞えしかば、征討の師をぞ遣はさるゝ、近衛兵の精兵を率ゐて、御渡海遊ばせしは、陸軍の中將大勳位北白川の宮と、金枝玉葉の御身なり、三貂角の御上陸、幕營ありし其の跡に、木を削りてぞ印さるゝ。炎熱燃ゆるが如き日も、三貂大嶺の嶮をば、馬にも召されず越え給ひ、大雨しきりに降る時は、濡れにぞ濡れて進まるゝ、士卒もこれに感激し、病兵さへも立ち上り、命を惜しまず進軍す、諸所の砦に籠りたる、賊兵等打ち出す彈丸は、雨か霰か白雪の、降り注ぐが如くにして、砲煙暗く天を覆ひ、百雷等しく落つるに似たり、宮は矢石を犯しつゝ、突擊せよとの命令に、川村少將小島大佐を

前とし。勇み立ちたる近衛兵、我れ前きに突進して、敵の本營に突て入る、賊之れに氣を呑まれ、右往左往に逃げ散りて、降參するもの數知れず、大砲小銃の戰利品、山をもつかんばかりなり。宮は此時悠々と、基隆城に入らせ給ふ、期くて六月十日には、臺北城を陷いれ、七月には新竹城を占領し明くる八月には彰化臺灣の兩府を定め、十月の始め方臺南指して進まるゝ、天暑くして瘴癆多く、地嶮しくして糧道絶え、千辛萬苦の其の中に、宮は士卒と食を分ち、ひるは汗馬に鞭をあて、夜は荒野に露營して、唯だ國のため君のため、平定の策を廻らし給ふ。嗚呼御痛ましや悲しやな。竹の園生の御身にて、餘りに辛苦

を積ませられ遂に御病氣に罹らせ給ひ、日々に重らせ給ふやう、御供の人々打ち驚き、都に歸らせ給ふやう、切に御諫め申せども、宮はいつかなきこし召されず、我れ官軍の將として、賊徒平定見ぬうちに、たとへ我が身は臺灣の、土となればとて士卒のみ打ち棄て、いかで都へ歸るべき、かごに召されて進まるゝ、御臨終の其の際に「賊徒平定と聞し召し、宮は莞爾と打ち笑みて、だゝ萬歳とばかりにて、敢へなく天に登り給ふと傳へ聞く、日本武の古を、今目の前に見參らせて、國中の民も勇士も慟哭せぬはなかりける。去りながら昨日今日とは思はねども、老弱不定に貴賤なし、唯人は名こそ惜しけれ皆人は、名を

後の世に殘せかし。

臺北融々仁政成　皇軍到所涌歡聲
旭光將被臺南地　殲滅土魁安萬世

と宮の吟ひ給ひし如くにて、盛功偉烈後の世に、輝き渡るぞ有難き。北白川の水は逝きて歸らねども、月影永く澄み渡り光は世々に流るらん。

七、川中島

天文二十三年秋の半ばの頃かとよ、上杉謙信は八千餘騎を從へて川中

島に打て出つ。我れ、此度の戰ば、武田信玄を追ひ詰めて、親しく雌雄を決せんと、うづまき返す犀川を、渡りて陣をぞ取にける、信玄は此の事を聞くより早く、二萬餘騎にて打ち向ひ、壘を固めて戰はず、謙信は氣をいらち、村上義清に言ひ含め、日陰闇山々の、彼方此方に兵を伏せ、木樵と似せし勇士を出して、甲斐の陣營に近づかしむれば、甲斐の兵謀事とは露知らず、朝霧の間に追ひまくる、待ち設けたる伏兵は、時こそ來れと鬨をどつと揚げつゝ打ち向ひ、袋に物を取るが如くに、一騎も殘さず打ち取りたり、信玄怒りて軍を雲霞の如くに送り出せば、謙信も備へを立てい打ち向ひ、入り亂れ入りみだれ攻め戰ふ、

龍舞ぶで雲を起し、虎嘯さで風を呼ぶ、破竹の如き勢ひに、入りみだれ攻め戰ふ其の有樣、暴風卷きまき百雷岩を突くに似たり、越後の軍退けば甲斐の軍之を追ひ、甲斐の軍退けば越後の軍之を追ふ、其の兵を合ずること十七度、何れを勝と知らま弓、信玄は一手の兵の旗を伏せ、川を渡りて蘆の草の、此の間に潛ませ謙信の、旗幟近々と進み寄り、おもてもふらず切つて入る、謙信の麾下の兵は、思はぬ敵に襲はれて、走る後より甲斐の勢、鬨をつくりて追ひかくる、宇佐美家行これを見て、虎狼の如く怒り、我が兵に下知をなし、敵の廣間より無二無三に突き入りて、淵瀨さ云はさず追ひ落す、信玄は度を失ひ

流れを亂して逃る後ろより、謙信唯一騎、赤栗毛の逞ましい、に鞭をあて、何處まで逃ぐるかと云ひも敢えず切り付くる、信玄は之れを救ふ暇なく、軍扇にて受けたれど、扇は二つに割れたり、

降ると見て傘とる暇もなかりける

川中島の夕立のあめ

早や二の太刀は信玄の肩先に切り込みぬ、あつと云ふ間に信玄の、命は岩とくだけ泡と消えなんあやふさを、救はんとすれど水瀨は早くして近よれず、部將原大隅槍を揚げ、只だ一突とつきはしたれどあだつきぬ、斯くては叶ふまじと只一打ちとなしたれど、馬に當りて馬逸

す、謙信は馬を靜めんと、千綱かいくる其の隙に、信玄は虎口を逃れて去りにける。

鞭聲蕭々夜河渡　曉見千兵擁二大牙一
遺恨十年磨二一劍一　流星光底逸二長蛇一

斯くの如く信玄を打ち洩したる、謙信の心の中は如何ならん、思ひやるだに哀れなり、信玄は肩の痛みに堪へかねて、其の夜の中に軍勢をまとめて歸る月影の、道をもとめてはる〳〵と、我が故郷に歸りける。我が故郷に歸りける。

八、小敦盛　初段

祇園精舍の鐘の聲、諸行無情の響あり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯はし、奢れるもの久しからず、只だ春の夜の夢の如し、猛き人も遂には亡ぶる習あり、偏に風の前の塵に似たり、偖も此度平家源氏の戰ひに、ものゝ哀れを止めしは、平家方の一族、母衣大將の其の内に、無官の太夫敦盛なり、敦盛其の日の出立は、練ぎぬに鶴縫ひたる直垂に、萠黄匂ひの鎧着て、鍬形打たる兜の緒をしめ、廿四さいたる切班の矢を負ひ、重藤の弓を持ち、連錢葦毛なる駒に金覆輪の

鞍を置き、御身からげに召されしは、さも勇々しくも見えにける、御一門と同じく主上の御供召され、濱に降らせ給ひしが、御運の末のかなしさは、御父經盛郷より讓りたまひしさえだと云へる漢竹の名笛を内裏に殘し置かれしを、若上臈の悲しさは捨ても御出ある可きに、敦盛は一の谷の戰に狼狽し、秘藏の笛をも取敢へず、逃げ出でたりと云はれんは、末代までの耻辱ぞと、取りに歸らせ給ひしが、時刻移れる其のひまに、御座船も兵船も、遙かの沖に漕ぎ出でたり、痛はしや敦盛詮方なくも鹽屋の方を心懸け、駒に任せて落ち給ふ、心の内ぞ哀れなる、其は偖て置き玆に又、武藏國の住人熊谷次郎直實は、此度一

の谷の先陣を承り、未ださしたる功名も顯はさず、無念至極に思ひつゝ、天晴れ玆に好き敵もがな、押並べ引組んで、功名せはやと思ふ折しも、遙かに敦盛を目掛け駒引寄せ打乘り、後を慕ふて追かくる、やがて直實大音あげ、それに落ちさせ給ふは、平家方に於ても好き大將と見奉る、斯く申す某は武藏の國の住人、しの黨の旗頭熊谷次郎直實なり、源氏方に於ても隱れなき敵にあゝものを、正なくも敵に後を見せ給ふものかな、早や引返し御勝負候へと、扇を揚げて招きけり、敦盛は更らに耳にも入れず、走馬に鞭を加へつゝ、浪打際まで落ち延び給ひ、日の丸の扇を打ち開き、沖なる船を招かせ給へば、船中の人

の其の中に門脇殿御覽じて、伊賀平内左衛門元國を召され、如何に元國あれを見よ、母衣懸武者の唯一騎、船を招ゞは左馬頭行盛かゝ、又は無官の太夫敦盛か、孰れも見よとの御諚なり、惡七兵衛景清承り、某見定め參らんと、白柄の長刀杖につき、船の艫に立ち上り、甲を傾け遙かの磯邊を打ち守り、嗚呼悼はしの御事や、あれにましますは修理太夫經盛卿の御子、無官の太夫敦盛にて渡らせ給ふぞよ、御馬の毛色袖印に至るまで聊か違ひ候はず、門脇殿聞召され、敦盛ならば此の船と早く寄せよと宣へば、水手楫取畏り、錢かに櫓楫を立て直し船を磯邊に寄せんとすれど、此の日頃吹き續きたる北風の名殘にて、

天に漲る白浪は恰ら雪の山に似たり、小船ならばおのづから、左手右手にも押し廻さるゝものなれど、殊に勝れし大船に而も大勢乘りたれば、磯邊に寄すべき樣もなし、敦盛はるかに之れを見て、斯くては叶ふまじ、いざ彼の船に游ぎ着かんと、駒の手綱をかい操て、海中へさつと驅け入れ、浮きつ沈みつ五反べかりは出でたりしが、駒逸物なれど逆卷く浪にせかれつゝ、泳ぎかねてぞ見えにける、直實此の樣を見るより大音揚げ、如何に若君あれ御覽候へ、平家方の御座船は遙かに程を隔てたり、然も浪風荒ければ、泳がせ給ふこと叶ふまじ、疾く引返し御勝負候へ、返したまはぬものならば、後ろより中指を射て參ら

せんと、弓と矢を打ちつがひ、徐ろに引てぞかゝりける、敦盛こゝを遁れ落ちんとすれど、若も源氏の鏑矢に射留められては、平家末代までの恥辱なり、いざ勝負を決せんと、駒の手綱を引返し、海中より颯と馳せ上り、染羽の鏑矢打ちつがひ、斯とぞ詠じ給ひける、

梓弓矢をさしわけて引く時は
かへす心を知るか其の君

と遊ばし給へば、熊谷も心ある弓取なれば、あつと驚き取敢へず、

いたづきのはやはづれぬと思ひしに
やと云ふ聲にたちぞといまる

と返歌をなして心靜かに待ち受けたり。

八、小敦盛二段

さる程に敦盛は、軈て打物の鞘をはづし、熊谷に切てかゝれば直實しかと受け止め、受けつ流しつ追ひつ追はれつ、二騎並んで面もふらず兹を先途と戰ひしが、未だ勝負も見えざるに、敦盛いざ組まんと打物彼處になげすてゝ、馬上ながらにむづと組み、互にかはす聲のうち、一度に鐙を蹈みはづし、兩馬が間にどつと落ち、上を下へと揉み合ひしが、痛ましや敦盛心は猛く勇めども、强氣の熊谷物の數とも思はね

ば、敦盛を心安く取て押へ、既に首を掻かんとするに、餘り手弱く見えければ、差うつむいて御さうがうを見奉るに、薄化粧にかね黑の有様は、容顔美麗にして恰も殿上人の、年の頃十四五ばかりと打見えて嬋妍たる兩鬢は空蟬の羽に比へ、是はいたしへ業平の交野の御野の狩衣、袖打ち拂ふ雪の下畫にうつすとも、此の若君の其の御姿は、中々筆にも及ぶまじ、餘りの悼はしきに少しくつろけまゐらせて、如何に若君平家方に於ては、如何なる公達に渡らせ給ふや、御名字を名のらせ給へとありければ、敦盛は世にも苦しき息をつぎ、偖ては武藏國の熊谷は、文武二道の勇士とは聞きつるに、何とて合戰に法なき事を言

ふや、我は天下の朝臣にして雲閣の座に連り、詩歌管絃の席に侍る身なれども、又武士の誡むる道をも粗承れり、それ武士の名乗ると云ふことは、互の陣に群りて胡籙を腰につけ、打物互に拔き持て、我れは何國の何某と、名乘つてこそ勝負は致すなれ、我れ今敵に組み敷かれ、下より名乘ると云ふことは、今ぞ始めて承る。直實聞いて仰せはさなれど苗字をあらはし首を取り、直實が譽れを顯はさん爲なり、敦盛それは隱れもあるまじ、只だ某が首を取り御邊が主の義經に見せ給へ、若しも義經見知らずば、蒲の冠者に見せて問へ、蒲の冠者も見知らずば、此の度一の谷の戰ひに生擒の者も多くある可し、彼の者

共に引き向けて誰が首ともわからずば、其の時こそ名もなき者の首と諦めて、只だ草叢に捨て給へ、直實聞いて偖は中々武士の勇める道を、委しく知し召されけり、世に憂きものは斯くにて候へ、君の仰せに從ひ御首給はらんとすれば、親と合戰子と爭ひ、花の下なる半日の影、月の前なる一夜の友、清風朗月飛花落葉の如くなり、嗚呼此の度一の谷の合戰にて直實が參り合ふことも、前世の事を思し召し御名字を名乘らせ給ひなば、只奉公の其の忠に後世を弔らひ申すべし、敦盛はいつまでも名乘るまじとは思へども、後世を弔なはれん其の嬉しさに、如何に直實我れを誰れかと思ふらん、門脇の修理太夫經盛が末子太夫

敦盛とは某なり、年は今年十六歳軍は今日が始めなり、さばかりものを尋ねずに早さ首とれや熊谷と宣へば、直實聞いて涙を流し、さらば敦盛卿に渡らせ給ひしか、某が一子小次郎直家も今年々は十六歳、偖ては御同年にてましますよな、直家此の度一の谷の初陣に先駈いたし弓手の腕に矢を射られ、某に向ひ此の矢を抜いて給はれと申せしが如何に直家敵と味方の其の中にて、何とて心弱きことを言ふやな、若しも其の手が深手ならば駒より下りて自害せよ、又薄手ならば敵と引組んで打死せよ、しの黨の名を汚すなとじつと眺みしに、某方を一目見て敵の陣所に駈け入るを、其の時後ろ姿を見しばかり今二目とは

見ざりけり、子を思ふ闇に迷ふは親心今身の上に知られけり、嗚呼直實がはかなき命をながらへて武藏國に歸り、直家が打死と申し聞かせなば誠に母も歎くべし、況でや御父經盛卿に於ても花の樣なる若君を磯邊に一人御殘し、さぞや歎かせ給ふらん、あはれ高きも卑しきも子を思ふ身は異ならず、今若君獨り打ち奉り、直實が恩賞に預るとて、千歳をたもち萬年の譽れを何かせん、末代までの御物語りに助け參らせばやと思ひ、いかに若君歸らせ給ひし後、御父經盛卿に仰せ上げらるべきことは、武藏國の熊谷と組んで候ひしが、一子小次郎直家に思ひ替へ助け參らせ候と、態々御物語り候へと、云ふより早く引き起し

鎧に付いたる塵打ち拂ひ、駒に打乘せ奉り、直實共に打乘り、暇乞ひしと五丁許りは見送りしが、後の山に人の聲誰れならんと見返せば弓手の方には森田平山控へたり、右手の方には虎衛殿佐々木四ッ目の紋の旗を押立て、山の上には御大將九郎判官源義經白旗を靡かし、膝元に取つては武藏相模龜井片岡伊勢駿河、源氏の一族聲々に呼はりけるは、武藏國の熊谷は敵と組んで候ひしが、已に組敷きながら助くるは必定逆心と覺えたり、二心ならば熊谷ともに打ち取れと聲々に呼はりければ、直實も今は詮方なく扇を擧げて招き寄せ、如何に若君あれを御覽候へ、いかにもして助け參らせたくは存じ候へど、味方の軍兵

雲霞の如くに滿ちみちたり、よもや逃らせ給ふまじ、哀れ願はくは某が手に掛け奉り、後世を弔らひ申すべしとありければ、敦盛涙を流し給ひ此處を逃れゆく先きにて賤しき者の手に掛り、面を曝さんも無念なり、かほど義理ある武士の手に掛り、討たるゝものならば恨むべきことさらになし、早や首とれや熊谷と西に向ひて手を合せ、覺悟極めておはします、鬼を欺く熊谷も心も亂れ氣も消えて、何處に太刀を當つべしとも思へず、途方に暮れて居たりしが、櫓番所の前なれば是非に及ばず、敦盛の花の首を水もたまらず打ち落す、さしも剛なる熊谷も其の儘死骸に抱き付き、濱に伏してぞ歎きける、弓矢とる身のか

なしさは樣々心を取り直し、敦盛の死骸を引立て見るに、弓手の方には卷物一卷差されたり、其の卷物を取り上げ見れば、此度都出での事を委しく書き記し、右手の脇には漢竹の横笛に扇を添へて差されたり頓て敦盛の御骸を葬り駒引寄せ打乘りて、武藏國の熊谷が平家方の一族母衣大將の其の中なる無官の太夫敦盛を打ち取りたりと、凱歌をどつと擧げ陣所をさして引て行く、やがて敦盛の御首を御大將實檢召されし後直實に賜はる、直實は賜ひし首を押し戴き、弓も刀も拋げ棄てゝ、髻切りて武士を捨て鎧の袖を墨に染め其の名を蓮生法師と呼び、新黑谷に引籠る、三年が間終夜法華經百萬扁を唱へ、敦盛が追

善を營みけり、是も敦盛卿御最後の其の時に一念の言葉をかはし、又熊谷が武士の情のありし故ぞかし、嗚呼此の事を何と聞て、唱へても憂きは世の中義理は熊谷、物の哀れを留めしは敦盛卿にて、諸事の哀れを留めたり。

九、小島高德

元弘二年如月の、小雨しく〳〵笠置山あやめもわかぬ夜の雨に、さして行くては楠木の蔭だに見えぬ常闇に、荒れ渡りたる人面の、心は鬼か蛇の如き妖怪變化の賊共は、恐れ多くも天皇の、龍駕を西の隱岐の

海路遙かに移しけり、其の有樣は今も尙ほ史上に見え身の毛もよだち胸さへも寸々にたへいる許り恨む目に古を睨む外ぞなし、其の時兒島高德は衆を集めて申すやう、仁をなすため身を殺し義を見てせざるは勇なきなりと、勵ます詞に勇む武士、共々向ふ船坂の山の險阻は此れやこれ、天の與へし要害と身を潛ませつゝ堅睡のみ、我が天皇を奪はんと待つに甲斐なや鳳輦は早や山陰に向ひぬと、聞くより早く松坂の木の根岩の根ふみくだき、望めば又も鳳輦は、遙かに過ぎし後ろ影、僅かに拜むばかりなり、今ぞ挫けし勇者の跡を見送りて、高德は天を睨みつ地に哭し姿をかへて身をやつし、風の晨に雨の夜もいとはず御

跡慕ひつゝ、善き折あらば赤心を我が天皇に聞こえ上げ、叡慮を安んじ奉らんと氣は張り弓の撓まぬも、守り嚴しき板屁し障さへ洩らぬ龍姿に、さし足拔き足日本刀櫻の老木かき削り、墨手の墨の黑々と赤き心を書き下す。

天莫レ空ニ匂踐一　時非レ無ニ范蠡一

十字の文字は長城の堅き固めや、勤王の、記しも賊はあきめくら、群り見るも明烏阿房々々と笑ふのみ、我が天皇の龍顏も最と麗はしく暫時の間愁ひの御眉開きける、斯くの如くに高德が、虎の穴だに恐れなき、虎の子得んと思ひにし、勳は後の世までも輝き渡り、曇りなき明

治の御代に愛國の、古きを溫ね新しく護りの神とたゝへらるゝ、讀む人々よ心せよ彼も人なり我れも人、食は今だに日の本の實る瑞穗なる飲むも昔も今も淸き日本の水、鄙屈の腸洗ひ去り、國を枕に誠忠の樂しき夢や結ぶ可き。

十、扇の的

八島の內裏のこなたなる牟禮高松の在家にあたり、火の手ありといふ程こそあれ、見る〳〵四方に廣がりて、黑煙天をぞ掠めける、阿波の民部大音あげ、今の煙は手過ちにあらず源氏の兵火を掛けたりと覺え

たり、軍の用意せよと走せ廻る、時は元暦二年二月十八日未だ東雲の程なれば、城中俄かに騒ぎ立ち上を下へと返しつゝ、制止すれども聞入れず、主を捨て親を顧みず我れ先にと逃げまよふ、かしる所に源氏の大將軍九郎判官義經は、紺地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧に、鍬形打つたる白星の甲に紅の母衣かけて、廿四さいたる小中黒の征矢を負ひ重藤の弓持ちて金作りの太刀を佩き、黒き馬の逞しきに白覆輪の鞍置て眞先に進み、畠山重忠熊谷直實平山季重土肥實平佐々木高綱等其外宗徒の郎黨を引具して城の追手に寄せ來り、木戸内目がけて切て入れば平家方にも音に聞ゆる越中次郎兵衛盛繼上總五郎兵衛孝光惡七

兵衛景清切先きを揃へて打て出で、追ひつ捲きつ受けつ流しつ鎬を削り鍔を割り、火花を散して攻め戰ひ、組んで差違ふる者あれば眞甲割られて倒るゝあり、手負ひを助くる暇なく死骸をあぐる隙もなし、互に名ある猛將勇士こゝを先途と戰ふさま、何時果つべしとも見えざりしに、牟禮高松の黑煙次第々々に覆ひ來て、已に矢倉も燒け落ちければ、平家も今は叶はじと各船に取乘て、沖邊はるかに漕ぎ出でぬ、行方定めぬ波の上須磨や明石の浦々も、よるべ渚の捨小舟おきにしなれもしらま弓、いつしか今は引かへて今日の味方は明日の敵、てきかみかたか矢か楯かふち瀬知られぬ船の中心細くも帆を上げて、風に任す

る身の上ハは思ひしられて果敢なけれ、茲に平家の船の中より花やかに飾りたる一艘、渚に添ふて漕ぎ寄する、頃は二月廿日の事なれば、霞は風に打ちなびく柳の五重に紅の袴着て袖笠被げる女房あり、紅に旭畫きたる扇を杖にさしはさみて、舟の舳頭に指立て是れあそばせとぞ招きける、此の女房は嚮に建禮門院の后立の時、千人の中より撰まれし玉虫の前とて舞の上手と聞えしが、歳は今年十九歳雲の鬢かすみの眉、はなの貌雪の肌、繪に畫くともいかで筆に及ぶべき、折節夕日に映ろひて、●●●●●●●●●いとゞ色こそまさりけれ。

同　二段

鬼を欺く、大丈夫が互に生死を爭ひて、船と陸とに立別れ弓矢手挾み拳を握り、睨み合ひたる折しも面白の景色やな、そゝろ浮立つ人ごころ波も玉散る海の面に花にかすみに別れ來し、都の春の空をしも思ひ浮べて打ち眺め修羅場變じて忽然に風流界とぞなりにける、判官是れを見たまひて畠山重忠を召され、あの扇射よといふを射ずして置かむは無念なり、射られなんやいかにと申されけり、重忠畏まり君の仰せ家の面目とは存ずれど、是は由々しき晴れの藝なり、重忠打物採ては鬼

神と云ふも更らに辭退な仕つらず候へども、弓矢は武骨に候へば若し射損じ候ては、私の耻はさることなれど、源氏一族の御瑕瑾と存ずるなり、玆に味方の内にして下野國の住人那須の太郎助宗が子に那須十郎兄弟はかやうのふものは賢しく仕る〳〵承はる、彼等のうちに仰せ付られ然るべしと申しければ、直ぐに十郎をぞ召されける、十郎畏まり御諚の上は仔細申すべくも候はねども、去年一の谷の坂落しに馬弱くして、弓手の臂を砂につかせ侍ひしが疵なほ癒へず候ひて、定の矢仕るべくも候はず、弟の與市こそ一定仕り候はん仰せ付けられ候へと、弟に讓つてぞ控へける。

同　三段

宗高其の日の裝束は、紺村濃の直垂の緋縅の鎧着て、鷹角反の甲を猪首に着なし、廿四さしたる中黑の矢を負ひ重藤の弓を持ち赤銅作りの太刀を佩き、宙赫白毛の馬の逞しきに洲崎に千鳥を散したる貝鞍置てぞ乘たりける、判官の召に從ひ御前近く馬より下り、甲を高紐にかけて畏まる、判官あの扇つかまつれ晴の所作なるぞ不覺すなとぞ命ぜらる、宗高承り仔細申さんとするを伊勢三郎後藤兵衛口を揃へ、面々の故障に日も早や暮れなんとす、兄の十郎指し申したる上は仔細候

まじ、海上暗くならば由々しき味方の大事なり、疾々急ぎたまへと云ひければ今は辭すべき樣もなく、宗高御請けをなし甲を童に持たせ、烏帽子引き立て薄紅梅の鉢巻して、手綱搔くり海の方へぞ向ひける、生年十七歳色白くして小髭生ひ、弓の取りやう馬の乘姿、優な男とぞ見えにける、渺々たる白砂に駒を歩ませて浪打際に打寄り見れば、弓手の方には主上を始め奉り、國母建禮門院北の政所二位殿官女其の外船に漕ぎ並べ楊梅桃李と飾られて、屋形の前後御簾も几張もさゞめきたり、妻手の沖には平家の大將軍大臣を始めとし、平中納言敎盛新中納言知盛以下平家の一門其の餘の諸將居並びて、數百の兵船を乘り浮

べ鎧の袖を連ねて是れを見る、後の方には源氏の大將軍九郎判官義經を始め、士大將に至るまで各駒を乘居て拳を握り片睡を呑み鳴を靜めて音もなし、其の所しも潮の遠淺なり鎧の菱縫は板鞍爪の浸るまで打ち入れば、勇み立ちたる駒の癖、いよ〳〵悍りて靜まらず手綱陶居鎭むれど、寄せくる浪に物恐れして足も定めず狂ひけり、折しも西風吹き來り船は浪間に漂ひて扇も串に定まらず、隙なく風に狂ひたれば、何れの所を射べしとも覺えず、日も早や西に傾きぬ、宗高運の極まりと眼を閉ぢ心を靜め、南無や八幡大菩薩別て故鄕那須大明神、弓矢の冥加あるべくば扇を座席に定めて給へ、若し射損ずるものならば弓折り

捨て〻自害して二度人に面を合はすまじ、今一度本國に歸さんと思召さば、此の矢外させ給ふなと心に深く祈念して、眼を開き打ち見れば風少し吹き弱り扇座席に定まりぬ、偖ては神力指添はれて手の下なりと勇みつゝ、矢頃は少し遠けれど、十二束三伏の鏑を拔出し重籐の弓に打ち番ひ暫し堅めて思ふやふ、扇面の日を射るは天の恐れも如何なり、要をこそと狙ひて切て放つ、其の矢海上遠く鳴響いて要の上一寸ばかり置いて吻と射切つたり、要は船に殘つて扇は空に上りつゝ、飜々と閃めきて海へ颯つとぞ落ちたりける、折節夕日に輝きて波に漂ふ有樣は、立田の川の秋のくれ三室の紅葉に異ならず、源氏は鞍の前輪や艘を叩き、平家は舷を打ち、敵も味方も同音に喝と揚げたる鯨波の聲、暫は鳴も止まざりけり、嗚呼宗高が此の日揚げたる榮譽の名八島の浦に打ちよする浪もろともに代々を經て、盡る期なきこそ目出たけれ。

十一、譽れの駒　初段

常盤がきはのとこしへに、八千代をかけて深緑、吹く木からし置く霜に色も變らぬ目出度さを、今日この頃は如何にして、緑の色は衰へつ枯れもやせんと思ひしは實に道理ぞ幾月日、雨降ることのあらずして

耕す業はやすからず、植えにしものは枯れはて丶、日照り續きのかなしさは、飢えて倒るを待つのみぞ何れの里も雨乞を尊き神に祈りける御驗ありてか小夜更けて、松の梢を誘ひ來る、風につれて聚雨、喜び祝ふ民草の、萠え出でなんとこぶける、一日二日を過ぐる間に、幾重と厚き叢雲は、うたてやうれひの種となり、朝起き出ては空を見つ又もや今日も降り續く、ことよとつぶやき暮しけり、果せる事や國々の、小河の水はみなぎりつ、大河となりて時の間に、堅き堤も破らるゝ、中にも時の將軍の、牙城を建てし大江戸の、東境を横れる、隅田河原のすさまじさ、畫にさへ寫せぬあり樣を、聞え上けり將軍に、家

光公は聞召し、猶豫ならじと近臣を、打ち從へて御櫓に、登りて遙かに見渡せは、聞きしにまさる有樣、渦まく水はわかねども、小家の流れ行くらしゝ、偖ては多くの人々の、命の際の一大事、いざや自から乘り出で丶、危き民を助けんと、其の旨仰せ出さるゝ、實に將軍の御成こそ、尊き事とて常の日は、幾日前より道筋の、警固にいとゝいそがはしさるを、此の日は輕々と、多くの衞士も從へず、俄かに河原に出ましの、程過ぎてより重臣も、從ふ如き次第なり、床几にかゝりて指揮したる、征夷將軍家光の、威望は特に尊くて、流されきたる婦女子も梓の弓と年老ひし翁も多く助けられ、救はるゝもの數知らず、

斯かるはげしき時さへも、武勇にはやる武夫の、道にかしこき將軍は治に居て亂を忘るなと、聖の言の葉思ひ出で、黒みに濁りておそろしき此の水勢に駒をかり、渡せとこそは仰せられ、左右の臣を見返らるされども君の仰せをば、畏こみまつりて我れ先きに、駒乘り入れて功名の、さきがけせんずものあらじ、皆々顔を見合せつ、早瀬を見てはためらひて、答へまつれる者ぞなき、將軍これを見そなはし、汝等いかに予が命を、背きて渡す者なきか、昔源氏の侍に、譽れも高き高綱や、景季ばらは宇治川に、駒を競ひて敵軍を、破りしためしあらずやは、或は近江の湖を、乘り切る武者もあらずやは、世の太平に慣れそ

めて、弓絃の音のひゝかずば、太刀ぬく術も自ら、忘れやすらん汝等の、かよわき心は武士の、數には入らぬものぞかし、サヲバ汝等戰場に、臨みし時は如何ならん、矢叫の聲銃の音、聞きなば如何に汝等は、魂消るばかり驚かん、予が言の葉を守らざる、卑怯のやからがいましめの、鑑に自ら乘り入れて、世の太平になれし、侍共のねむりをば、さましくれんとのたまへり、傍の人々驚きて、こは危かり我が君と、駒の手綱に縋りつゝ諫むる臣もありつれど、さらばと云ひて此の儘に、思ひ止まる君ならじ、放せと鞭を上げ給ひ、終には諫むる忠臣の、面を打てどいかにいかに、一度手綱を放ちなば、君は逆卷く水底

の、藻屑と消えんよしやまた、神のみ助けあるとても、尊き御身を傷はゝ、如何なる事や生ぜんと、放せと打てど放さじと、手綱にすがるせとぎわに、誰れとは知らず水上より、か黒き駒を乗り入れて、浪のまに〳〵漂ひつ、さしも烈しき水勢を、美事に駒をあやなして、覺悟極めし猛者ありき、將軍に見そなはし、心の内にうなづきて、駒乗り返し人々よ、彼のますらをの姓名を、尋ねよとこそのたまへる、折しも再び水音し、先なる駒につゞかんと、渦まきかへすを恐れずに、進める騎馬の勇ましさ、家光笑を含みつゝ、待つ間程なく武士の、二人の名をぞ聞えあぐ、先なる駒は阿部豊後、後ろの駒は郎黨の、中にすぐれし彈衛なり。

同　二段

誠忠無二の大丈夫の、心も惜しや通せざる、いたましきこと昔より、數のためしは、あるなれど隅田の早瀬に乗り入れて、武士の鑑といましめの、人の眠りを醒したる阿部の豊後忠秋は、去年の春より將軍の勘氣を受けしことあるが、こは忠秋のいさぎよき、心に君のいそしみを、助げまゐらしせんものと、思ひしことも水の泡、不興を蒙る是非なさも、日々の仕出は怠らず、君の御爲と盡せども、御言葉さへもた

い一度、仰せられざるのみならず、豐後を見ては顔そむけ、例日も御景色荒らかに、變らせ給ふを見るにつけ、斯くては近習に侍るさへ、心苦しき限りとて、自づと人にもうとまれつ、光る黃金も時を得て、益々深く土中に、埋もるさまに似たる故、今は生甲斐なきのみか、心づくしもうたかたと、消えてはかなき浮世かな、刀の手前武士の意地、只潔く腹切りて我が眞心を君前に、聞え上げんと幾度か、思ふ心を老臣の、平田彈衞に止められ、勵まされては自らも、思ひかへしつながらへど、去る菊月は菊の香の、武士の譽れの赤心を、歌に咏じて奉る、多く侍れる侍の、中にも一人忠秋の、心の裡を將軍の、御感に入れど如何にせん、未だ忠秋の啄まれたる、大和歌てふことをしも、知しめさずやありつらん、誰ぞ啄まれしとお尋ねに、歌の主こそ阿部豐後、忠秋なりと近臣の申し上ぐるに、家光公笑みまし給ひしかんばせも忽ちかはりて、御座を立つ、こは如何にぞと老臣も取り付く島もなかりけり、豐後は獨り茫然と、寄るべなぎさの捨小舟、もやいも絶えつかぢ折れつ、浪のまに〳〵漂ふは、武士と生れし耻なるれ、思ひ極めて死んずと、今日や覺悟を死出の山、よしや彼の世に旅立つも、魂魄此の土に止まりて、君を守らん志、忠義の道は忘れじと、彈衞を呼びて事つばら、說きて靜かに腹切らん、眞の武士の道をしも、蹈みて

や行かん西方に、頼むは彌陀の利剣より、國と君とのことぶきは、幾千代かけて榮えませ、萬代かけて祈りつゝ今や憾はさらになし、老臣彈衛も諫むべき、言の葉なけれど誠忠を、天も憐れと思しけん、平田彈衛が胸の内、浮み出でたる諫め言、捨つべき命をながらへて、若しや大事と聞きし時、馬前に於て潔よく、腹切る事は如何にやと、涙片手に說き出す、時しも三代將軍の、股肱の臣と頼るゝ重き臣より添へ言葉、ありも事とて忠秋も、死せしと思ふ覺悟から、如何なる難きことあるも、耐え忍ばれんことやある、死するの事は一旦に、易き事にてありつれど、生きながらへて君前に、勳功立つるは難きぞと、吾れ

と心をひるがへし、これより後はかげながら、君の御身に恙なく、御代太平に治まれと祈るの外ぞなかりしが、數の月日を經るまゝに、變るは人の心なれど、變らで盡す忠臣の、心は天照大神の、しろしめしけん洪水は、幸か不幸か忠秋が、命を捨つる晴れの場と、修羅の巷を欺ける、此の大水に駒を入れ、君の自ら渡さんと、思ひつめたる一刹那、自ら駒を乘り入れり、水音高く響きつゝ、主を思ふて生き死を、共に白髮の老武者が、死出の曠れとて畢生の、勇氣おこせし駒のせな、大浪なりと寄せばよせ、逆卷く水勢も眼にはなし、命をまとの主從は、はや中流まで進みつゝ、此方の岸よりながむれば、浮きつ沈みつ沈

みつ浮きつ、あたう勇士を水のため、一人ならず二人まで、失ふことぞ口惜しき、扶けの舟を出せよや、扶ふの舟をいざ早く、早く出せと君命の、厚き仰せをかしこみて、大船小船こぎ出せど、宛然似たり木の葉ぶね。

同　三段

駒を御するの術あるも、心にそれぞと極めたる、心なければいかでかは、みなぎるそれを乗り切りて、彼方の岸に達す可き、豊後は死するの覺悟なり、彈衛は生きて生ひ先の、余命をつながむ心なし、主從迭み

に言はれども、死するの外はあらじぞと、思へば難きこともなく、嬉しや豊後はやうやうに、彼方の岸に登りけり、勞れて駒をいたはりて後の方を見返れば、只だ我れのみと思ひきに、續ける武者の又一騎、ゆかしき名をは尋ねんと、近づくまゝに見れば老臣平田彈衛なり、老の氣丈に忠秋が、先途を見んとて續きしが、我が身を大事と主從の、三世の縁あるぞとは、彼れが如きを言ふならめ、持つべきものは忠臣と、己が心にたくらべつ、思はず知らず大丈夫が、落す涙ぞいぢらしし、彈衛はやがて陸をさし、上りて豊後忠秋の、御前に頭をうなだれつ、物言ひたげに見ゆめれど、先き立つ老の涙こそ、間はでも著るし

忠秋が、目出度く早瀬を乗り切りし、祝さいふにぞありしなる、忠秋彈衞が手を執りて、暫し言葉もあらざれど、彼方を佶つと見返れば、將軍始め近習等の、扇を揭げて乗り返せ、駒を再び乗り入れて、此方の岸に來られよと、いへるが如きさまなりき、此の事見たる主從は、いかでかいかでためらはん、死するはもとより覺悟なり、駒も勞れて見ゆれども、哀れや主が亡き命、覺悟しつるを悟りてん、水勢を恐れぞあやなせる、まゝにぞ向ふ嬉しさと、駒のたてがみかいなでゝ、再び彼方に渡らんと、人にものいふ如くにて、諭せば駒もいばえつゝ、勇氣を示すに似けりたり、さらばと云ひて見返りつ、續けや彈衞鐵石の、矢竹心の徹らざる、ためしは未だ聞ざりし、只傷しきは老ひ先きの、短かきいましを苦めて、われと生死を共にする、此の事のみぞ悲しける、赦せよ彈衞としばたゝく、涙を瞼に拂ひつゝ、言へば彈衞は殊更らは、主をはげます言の葉は、猛く聞えどおのづから、嬉しき今はの仰せをば、いかでか爭で忘れじと語りし末は涙なり、彼方の岸には此の事を、知るや知らずや招きつゝ、扇を上て呼ぶさまは、歸へり來れと聞えたり、必死の覺悟にいざ彈衞、續けと鞭を揚げければ、應と彈衞も諸聲を合せて川に乗り入れり、將軍之れを見そなはし、二つの駒をかり入れし、彼等勇士の心こそ、必ず死なん心なれ、助けの船

はあらざるか、先きに出せし船人は、如何にやしけんちり〳〵と、云ひ甲斐なくも流されて命の瀬戸際束の間の、爲めにはあらじ今一度、こぎ出せよとく〳〵と、烈しき下知に船人は、必死と川瀬を横切りて豊後が駒に寄にけり、上意に候此の船に、乗りて彼方に渡されよ、上意なるぞよ上意そよ、呼べば忠秋見返りて、彈衛にそれと目くばせし、尊き上意にありつれど、馬上に川を横ぎられ、覺悟を今更らひるがへす、これぞまことの武士の、身を終るまではづかしゝ、彼方に渡して恙なき運命あらば其の時に、厚き情けに報はなむ、只だ此の儘にと主從は、遙かの下手を打渡り、難なく陸へ上りけり、主從とも恙なく、されど

も彼れは倒れたり、嬉しきあまりくろがねの、心もゆるみし故なるか、倒れたれども介抱の、厚き醫師に助けられ、彈衛諸共君前に、進み出けり目出度も、君も豊後が忠心を、嬉しきことにおぼされつ、數の月日をすげなくも、苦しめたりしいたはしさ、今日の手柄をまのあたり、しろしめしたる將軍は、心の誠目に涙、誠の武士と後の世に、傳へらるべき忠臣は、阿部豊後忠秋と、平田彈衛の主從ぞ、斯くまで赤き眞心を、盡さんものとの忠臣は、類ひまれなり五萬石、武士の鑑と賜はりて、彈衛も厚き御言葉を、陪臣ながらも下しけり、其のいさほしは今の世も、駒止橋と名も高く、往きかふ人も古を、思ひ出でつゝ偲

ばれむ。

十二、形見櫻　初段

久方の雲井に高く照る月も、滿つれば缺くる習ひあり、況してや人間の世の盛衰も目の當り此の理の例には茲に顯るゝ、去れば庄内都城主伊集院源次郎忠眞は、島津の重臣として庄内八萬石を領し榮譽榮華にほこり、父孝況が慾心の餘りにや反逆を企て、君の御手を汚させ給ふにより、悴源次郎忠眞は父の逆意をつぎ、頃は慶長己亥潤三月下旬庄内都の城に立籠る、山田安永志和地の城財部野美谷梶山勝

岡山の口梅北恒吉末吉まで、都合十二の砦を構へ、龍の雲を起し虎の風を呼ぶ勢にして、白石永仙を初めとして、射答院左近伊集院新右衛門の尉比志島式部少輔倉野七兵衛の尉猿渡肥前守伊集院嘉門之介伊集院兵部少輔忠能、忠眞が弟伊集院小傳次等を先として都合其の勢二萬餘騎、砦々に馳せ集り籠城の用意をなして、島津屋形に弓を引くとの聞えあれば、君聞召し以の外に御腹を立てられ、其の儀ならば早く討手を差し向け、源次郎忠眞が首をはね實檢に備へよとの御諚なれば、先づ一番に島津中務少輔忠豐新納武藏守忠元、梶山權左衛門久高喜入攝津守忠政阿多長壽院盛淳、山田正巖押川强兵衛村尾源左衛門松

清等を初めとし、物に馴たる屈竟の兵共馳せ集り、殘る所なく手配し軍旅の指揮をぞなし給ふ、玆に又北郷作左衛門之尉三久は、北郷長千代丸、引立て數千餘騎を從へ、都合其の勢十萬餘騎甲の星を炎天に輝かし旗差物を嵐にひるがへし、同く六月上旬君の御馬を出させ給ふこそさも勇々しくぞ見えにける、是れはさて置き玆にまた、平田三五郎宗次は、平田太郎左衛門增宗の息男とかや、此年三五の秋の月雲間を出づる風情より、尙ほあでやかに麗はしく容色無双の少年なり吉田大藏清家と兄弟の好み淺からず、共に故郷を出でしより片時も側を相去らず、征鞍山路を分くる日も同じく迷ふ馬蹄の塵、軍旅野外に屯せば同じ床ねのかり枕、共に眺むる夜半の月、況んや戰の場まで一つ道にと志す、去れば宗次其の日の出立は、何時に勝れて花やかに先づ肌よりは伽羅の匂の肌寄せに、卯の花おどしの鎧着て態と甲は召さゝりしが、みどりの髪を振分げ黃金作りの太刀を佩き、平安城永吉が打つた る大身の鎗を携へ、今ぞ出陣になりぬれば、宗次は母上の前にひざまづき、今生の暇乞ひを述べければ母上は只涙にくれ暫し言葉もなかりしが、嗚呼親子の別れ程何に例へん方もなし、親の心は斯くまでも勇み立ちたる宗次は已に駒に打ち乘り急ぎしに母上後より呼び返し、必ず〳〵合戰の場にて、未練な事は仕給ふな、骸は戰場にさらすとも名

は末代に殘さるべしと云へども、枯野のきり〳〵す泣きわめきてぞ申さるゝ、宗次は豫て覺悟のことなれば、何の答もなく只が呆然として居たりしが、振り分くる黑髮の鎧の袖にはら〳〵と、亂れかゝりし有樣は宛然楊柳の雨に逢ふて春風に靡く風情なり、斯くて清家に追ひ付き共に打列なり急ぎしに、此處は早や敷根の里にもなりぬれば、音に名高き門倉藥師に參詣せんと、駒より諸共に飛下り恭々しくも南無藥師尊と合掌し、此の辻堂に禮拜して一首の歌を連ねける、

書きおくも形見となれや筆の跡
我は何國の土となるらん

と清家宗次を抱き上げ筆先き高き天井の板の表に記し置き、又は此度庄内一亂に依り清家宗次諸共に、合戰に赴くと堂の柱に書きつけしは末の代までも殘されて、見る人毎に涙は袖に餘りける、共に蹈み出す武者わらじ、結び合せて行く先の、譽は後に知られたり。

形見櫻　二段

去程に清家宗次打連れ、はる〳〵と急ぎしに、此處は早や庄内都の城になりぬれば、柳川原のほとりに、春田周左衛門道春に行き逢ひしがこは如何に清家宗次殿にてましますや、嗚呼羨ましき有樣かな、御存

じの通り某も内村半平と十四歳の春の比より、兄弟の契浅からずして春は花秋は月見に詩歌を吟じ、武士の勇める道を相勵み樂みけるが、斗らずも此の一亂到來し、矢竹心の梓弓互に敵味方と引き分れ、今半平が身の上はいとゞ淋しく思ひし故、和地の城主伊集院嘉門之助に訴へ、御内の内村半平と兄弟の契約致せしにより、何卒一日の對面を赦し給らば生涯の本望なりと、思ひの程を深く書き込み、矢文を以つて乞ひければ、城主嘉門之助はいと愁着の實情を感し、情あつて此の程柳川原に於て頼みある酒宴致せしに、何語るべき暇もなく別れの盃さすが又いつか其の日も吳羽鳥、あやにくも泣て別れの哀なり、涙川

其の源をたづぬれば誰が誠より出でぬらん、又は古歌にも、逢ふ時は語り盡すと思へども別れになれば殘る言の葉と今半平が身の上に積る白雪も思ひは、此の道春が胸の闇海人の焚く火にあらねども、夜はこがれて螢火の燃えて飛立つ形もなしと、清家が鎧の袖を執つて道春がさめ〴〵と泣きければ、共に涙を流しける、互に此の場は別れしが、斯る所に敵の関の聲矢叫びの音おびたゞしく聞えければ清家宗次諸共に馬に乘り出す、清家が乘りたる馬は逸物なれば思はずも、宗次二町ばかり程遅れける、かゝる所に兎ある木陰より尾の若者五六人宗次を見かけ、天晴れ類なき美少年かな、いざ生け取りにして、夜のふす

まを一つにして只なぐさみものにせんと、大手をひろげて取て掛れば宗次は大音揚げ、汝等如き者共に此の宗次がおめ〳〵と捕へらるゝものかと、大身の槍を馬の平首に引そばめ、みどりの黒髪逆に立向ふ敵を突き伏せ切り伏せ車輪　如くに切つて廻れば、敵兵今は叶はじとや思ひけん逸足出してにげて行く、宗次は大音揚げ、最前の廣言にも似ぬ臆病至極の者共、返せ戻せと聲を掛け駒を飛ばして追掛けゝれど、皆臆病神に誘はれて後をも見ずして逃げて行く心の裡こそ淺間しや、宗次は赤になりたる大身の鎗を、流るゝ水に打ちそゝぎ、暫し息をぞつきける、是れは偖置き玆に又、吉田大藏清家は、思はずも大勢の

中に取り固まれしが、斯くては叶ふべからずと家に傳へし重藤の弓の眞中にぎり、大音揚げて呼はる樣、玆に控へしは島津方に於て吉田大藏清家とて、名を得たる强弓の精兵矢次ぎ早やの手利きなり、汝等共能く見よ、矢先きに敵は嫌ふまじと、五人張に十五束、若し取り引きつめ射る程に生死は知らねど三十五六騎は射て落す、最早矢種もつきぬれば持ちたる弓をカラリと投捨て、固より清家は丸目内藏頭賴忠が門人にて、持者流の達人なれば、大勢が中へ面も振らず割つて入り、當るを幸ひ玆を專途と火花を散らして戰ひしが、恰も虎の荒るゝに異ならず、敵兵叶はじとや思ひけん手詰めの勝負は無用なりと、鐵砲の者

共十四五挺を相募りつるべ掛けて放ちければ、哀れ清家其の身體石に非れば、敵の放ちたる鐵砲に胸板を打貫をれ、終に財部の朝の露とぞ消えにける、未だ惜しかる年の廿八、惜まぬ人こそなかりける、茲に又清家が郎黨佐兵衛武任は、主人の死骸を肩にかけ味方の陣に退きしが後を見れば宗次は清家を尋ねかねたる有様にて、唯だ呆然として居たりしが、武任打ち見て宗次公がと問ひければ、清家は如何にとありけるを最早や打死と答へける、宗次は以の外に打ち驚き、夫れより直すに駒より飛び下り、清家が死骸に抱き付き嗚呼淺間しや清家殿、死なば一緒と思ひしに合戰に暇なくして後れしこそ無念なれと、生きた

る人に言ふ如く、卯の花の鎧の袖に髪亂る、世にある中に云ひ暮し桃李は物を言はねども、今は是後の色見えて跡に殘りし楓葉の、散るを惜しまぬ太刀のつか是れまでなりと思ひ詰り、武任さらばと云ひ捨て、駒引き寄せて打乘り、大音揚げて名乘る樣、此處に進みしは島津方に於て、平田三五郎宗次と申すものなりと、大勢が中に面も振らず割つて入り、爰を先途と世にも烈敷く火花を散して戰ひしが、向ふ敵を七八騎は打取り其の身も數ケ所の傷を蒙り、哀れ三五の秋の空、かはりゆく代の習にて、義の爲めに百年の命を縮め骸を戰場にさらし、一陣の風に添はれて、遂に財部の朝の露と消えにげり、今を盛りの花衣

着て見る人々は、涙は袖にあまりける。

形見櫻　三段

爰に又新納武藏守忠元は文武二道に達し、和歌の道にも長じたりし身なりしが、此の度の戰に粉骨を盡し、八旬に垂んとして山田の城を攻め落し、比類なき働きありしと、兼ねてより我が軍卒の武勇を賞美し仁愛深く恩賞を與へなづけ給ふにより、向ふ所敵なく皆我が手足を使ふ如くにて、假りにも敵に押付けを見せたる例しなければ、近國他國に隱れなく武勇の程ぞ聞えける、玆に又富山三十郎とて生年二八ばかりと打ち見えて、容顏無双の少年なりしが、花やかなる鎧を着し一陣に進みしは、天晴れ勇々しく見えたりしが敵の放てる鐵砲に胸板を打ち貫かれ、はかなき最後は財部の草葉の露とぞ消えにける之れを聞くより忠元は、早くも尋ね訪はれしが、らんじやの匂ひ消えやらで蓬がもとに打ち伏して、玉の樣なる顏も忽ち消えて雪霜の、氷の肌と冷えわたる姿と化してあぢきなや、朝に紅顏あつて生路にほこり夕には白骨となつて荒野に朽つ、去れば詩の心にも同じ思ひのすがむしろ、露をかたしき草枕亂髮は打ち解けた姿となりし仇し野の、草葉にすだく虫の聲と泣く〳〵死骸を埋め、餘り心の痛しさに一首の歌を連ねける

昨日までは誰が手枕に亂れけん蓬がもとに掛る黑髪、と追善にそなへ給ひて、手向の水を打ちそゝぎ暫し回向をなしにける、去れば形見の櫻、誰が此の里に植え置きて名も財部に匂ふらん、見る人聞く人毎に涙は袖に餘りける、斯る折しも所々の陣山田安永志和地の城、合戰はげしく太刀打のしのきを削るつば音の、轟く駒の足並も揃ひ立ちたる敵味方、命は塵芥よりく輕く義は金鐵よりも重くして、死骸の上を飛び越え〳〵攻め戰ふ有樣は何時果つべき戰ひとも知れざりけり、又は白合永仙が奸計におちいり味方の勢を數多損じけれど、同じく十月上旬石田に御陣を移させ給ひ晝夜を別たず攻め給ふ、先づ一番に島津中

務少輔忠豐喜入攝津守忠政、樺山權右衛門尉久高山田正巖押川强兵衛村尾源左衛門松清等を初めとし、物に馴れたる屈竟の兵共當るを幸ひ、爰を專途と切りて廻れば打るゝ者數知れず、去れば內府公庄內一亂の趣き聞し召し、和ば、飢に及ぶ者數知れず、又は兵糧の道を絶ち給へ久甚兵衛直友山口勘兵衛の兩人を差下され、和睦降參すべきとの御諚なれば、此の時忠眞は都の城にとにかくに固めけれど、十二の砦も過半落城に及び、日々兵氣衰へ只術計に盡き果てたる折柄なれば、こは有難き御諚なりと直ぐに君の御前に罷り出で、降參の趣き後悔の色を顯はしければ、君聞し召し汝が日頃の逆罪深しと雖も、內府公の命に

依り又は當家の門葉先祖の勳功捨て難く、殺人刀活人劔の心を以つて死罪をなだめ本の如く臣下となし給ふ、されば忠眞は有難き君命を蒙り、夫より隅州野尻の邊にやつれはて居たりしが、茲にむさかの士押川治右衛門淵脇平馬と打ち馴れ野尻の原に雉狩りに出でけるが、押川一の雉をねらひつめて打ちけるに、雉は早くも飛び去り其の矢あやまつて忠眞が眞向を打貫き、其の儘馬より眞逆様に落ちて死したりける、是れを忠眞が罪科天道未だ赦さゝるにや終りの程こそ恐ろしけれ。されば白石永仙は忠眞に反逆を進めし科により、隅州姶良の郡脇元に於て獄門にかけられ、其外賊殘らず亡ぼし給ふ、されば忠眞は普代恩顧の長臣として御聟にも成りしが、如何なる天魔の入ぬらん終の程こそ知られたり、夫より薩隅日三州靜かに治る御代の程こそ目出度けれ。

十三、花の香

世の中に梅は匂ひて櫻は色よそふしての後、人は情の下に住む、嶺の小松もひとり立つとは申せども、夜半の嵐はのがれ難なし、富士や淺間の嶽とても霧や霞に埋れて三千世界に光を照らす日月さへも雲のとざしは如何にせん、況してや人間は五尺にたらぬ身を持ちて一人立し

く世を渡らんと思ふ人こそはかなけれ、君は臣下をたのみ臣下は又君を尊み奉る、親子兄弟夫妻の中又は朋友の交りとても互に頼み頼まれて、妹脊の中にて世を渡らんと思ふ人こそ、是れがまことの人ならめ、吾關白に過ぐる身は風の前なる燈火にてはなけれども、消ゆるに易き身をもちて惡をたくむは地獄なり、善を願ふはこれぞ極樂なる、地水風火は娑婆のかりもの死して冥土へ赴けば、我がものとては一物もなし、釋迦も孔子も名のみ殘して今はなし、達摩尊者の無一物説れし事も實に道理なりと知られたり、左もあらば古へ花に增したる美人の數をかぞふれば、漢の李夫人唐の楊貴妃、我が朝にては七條皇后和

泉式部に小野の小町、常盤御前と云はれし人も、死すれば野邊の土となる、其の名も高尾の紅葉野田の小藤、吉野の櫻北野の梅も、盛りの程は名も高けれど、散りての後は色も香もなし。

十四、遠矢

新田足利相挑みて未だ戰はざる所に、本間孫四郎重氏黄瓦毛なる馬の太く逞しきに、紅下濃の鎧着て只一騎、和田御崎の波打際に馬打ちよせて沖なる方に向ひ、大音上げて申しけるは、將軍筑紫より御上洛候へば、定めて鞆尾の道の傾城共多く召具せられ候はん、其の爲めに珍

らしき肴一ッ推て進せ候はん、暫時御待ち候へと云ふ儘に上差の上鏑矢を拔いて羽の少し廣がりけるを鞍の前輪に當て搔直し、二所籐の弓の握太なるに取り添へ小松の蔭に馬を打ち寄せて、波の上なる鵜の己が影にて魚を驚かし、飛び下る程をぞ待ちたりける、敵は是れを見て射放したらんは希代の笑ひ哉と目を放たず、御方は是れを見て射當てたらんには時に取つての名譽かなと機を攻めてぞ守りける、遙かに高く飛び揚りたる鵜波の上へ落下りて二尺ばかりなる魚を、主人の鰭に掴んで沖の方へ飛び行ける所を、本間小松原の中より馬を駈け出し、追様に成て懸鳥にぞ射たりける、わざと生ながら射て落さんと片羽が

ひを射切て直中をば射ざりける間鏑は鳴り響きて、大内介が舟の檣に立ち、鵜は魚を掴み乍ら大友が船の屋形の上へぞ落ちたりける、射手たれとは知らねども、敵の船七十餘艘には舷をふんで立ち並び、味方の官軍五萬餘騎は汀に馬を控へて、射たりや射たりと感ずる聲、天地を響して靜まり得ず、將軍之れを見給ひて敵我が弓の程を見せんとて此の鳥を射つるが、此方の船の中へ鳥の落ちたるは味方の吉事と覺るなり、何樣射手の名字をきかばやと仰せられければ、小早川七郎舟の舳に立ち出で、類少なく見所あつて遊ばされつるもの哉、偖ても御名字をば何と申し候やらん承り候はゝやと問ひたりければ、本間弓杖

を把りて其の身人數ならぬものに候へば、名のり申すとも誰れか御存じ候ふべき、但弓矢を取りては阪東八箇國の矢の中には名を知りたる者もござ候はむ、此の矢にて名字をば御覽候へと云ふて、三人彈に十五束三伏ゆら〳〵と引き渡し二引兩の旗立ちたる船をさして遠矢にぞ射たりける、其の矢六町餘を越へて將軍の船に並びたる佐々木筑前守が船を眞中過ぎ通り、屋影に乘りたる兵の鎧の草摺に裏をかゝせてぞ立たりける、將軍此の矢を取り寄せ見給ふに相摸國の住人本間孫四郎重氏と小刀の先きにて書たりける、諸人此の矢を取り傳へ見て穴懼ろし、如何なる不運の者か此の矢先に廻つて死なんずらんと兼ねて胸をぞ冷しける、本間孫四郎扇を擧げて沖の方をさし招ぎ、合戰の最中にて候へば、矢一つも惜しく存候、其の矢此方へ射返してたび候へと申しける、將軍これを聞給ひて味方に誰れか此の矢射返しつべき者あると高武藏守に尋ね給ひければ、師直畏よりて本間が射て候はんずる遠矢を同じ所に射返し候はんずる者、阪東勢の中には有るべしとも存じ候はず、誠にて候やらん佐々木筑前守顯信こそ西國一の精兵にて候なれ、彼れを召され仰せ付けられ候へかしと申しければ、實にもとて佐々木をぞ呼ばれける、顯信召に隨つて將軍の御前に參つたり、將軍本間が矢を取出して此の矢本の矢坪に射返へされ候へと仰せられけ

れば、顯信畏つて叶ひ難き由をぞ再三辭し申しける、將軍強いて仰せられける間、辭するに所なうして已が船に立ち歸り緋絨の鎧に鍬形打つたる甲の緒をしめ、銀のつく打たる弓の反高なるを檣にあてゝ、きり〳〵と推し張り船の舳先きに立ち顯れて弓の弦かひしめたる有樣、誠に射つくべくぞ見えたりける、斯る處に如何なる推參の馬鹿者にてかありけん、讃岐勢の中より此の矢一つ受けて弓勢の程御覽せよと、高らかに呼ばはる聲して鏑矢をぞ一つ射たりける、胸板に弦をやうちたりけん其の矢二町までも射着かず、波の上にぞ落ちたりける、本間が後ろに控えたる五萬餘騎同音に、嗚呼射たりやと欺いてしばし笑ひも止まざりけり、此の後は中々射てもよしなしとて佐々木は遠矢を止めてけり。

十五、若武者

心太くも夷等は君のめぐみをよそにして、名も陸奥の金澤に立て籠りたる程もなく、討手の兵は忽ちに送りこされて一場の、修羅の巷ぞ開かるゝ、矢合せなしつ敵味方山岳震ふ鬨の聲、此の時味方の若武者に名うての鎌倉權五郎手柄を殘すは今日なりと、花々しくも出立ちて敵陣深く乘り入るゝ、敵はすぐれし若武者を心憎くや思ひけん、ねら

ひ違はぬ一筋の征矢は左手の目に立てり、されども勝に乗じたる彼の若武者は其の矢の根抜かでまもなく弓射たる敵を目掛けて追ひかけつさへぎる雑兵拂へのけ、終に仇を得たりけり、此の城攻めに若武者が雄々しき振舞ひ轟ろきて、今にその名もかむばしく、八幡太郎義家が、後三年の戰ひの中に優れてたゝへらる。

十六、千早振

千早振る神の御代より吳竹の、代々にも絶えずあまびこの音羽の山の春がすみ、思ひみだれて五月雨の、空もとゝろに小夜ふけて、山郭公啼く毎に、誰れも目さめてから錦立田の山の紅葉ばを見てのみ忍ぶ神無月、しぐれしぐれて冬の夜の庭もはだれに降る雪の、猶ほ消え歸り年毎に時につれつゝ哀れてふ言をいひつゝ君をのみ、千代にと祝ふ世の人の思ひ駿河の富士の根の、燃ゆる思ひのあかずして別るゝ涙ぶち衣、おれる心もやち草の言の葉ごとに皇王の、おほせかしこみまきゝの、中につくすと伊勢の海の浦の鹽がひ拾ひ集め、とれりとすれど玉の緒のみちかき心思ひあえず、猶ほ新玉の年を經て、大宮にのみ久方の、晝よる分かず仕ふとてかへり見もせぬ我が宿の、忍草おふる板間あらみ降る春雨のもりやしぬらむ。

十七、靖國社

光り輝く日の本の、其の國守る兵よ、汝を育てし父母の墳墓の國ぞ苟も、父母に孝ある者ならば、死して忠義の鬼となり、よしや火の中水の底、などか厭はん敷島の、大和魂飽くまでも、御國の爲めと君の爲め、盡すは將士の義務ぞや、汝等、朕の股肱ぞと最も惶きみことのり、義は山岳も啻ならず、死は鴻毛と覺悟して、其の皇に君しや又、寇なす戎夷ありもせば、躊躇ふことはなきぞかし、討ち夷げて大君の叡慮を安め奉れ、彈丸は霰れと飛び來るも、劍は林をなすとても、などか

恐れむ敷島の、國民なれや兵よ、忠義の爲めに死する身の、屍は野邊に曝すとも、名は後の世、香しく、櫻と匂ふ九段坂、空に聳ゆる靖國の、護りの神と崇らる、我が忠勇の兵よ、死すべき時に死せざれば、死するにまさる恥あらん、一死を以つて國の爲め、君の爲めにと盡せかし、君の爲めにと盡せかし。

十八、廣瀨中佐

名も高き、渤海灣の咽喉なる、旅順口の戰に、籠る露艦を鎖さんと、閉塞隊の勇ましく、自ら之に指揮をなし、二度の任務を全ふし、名譽

の戰死を遂げにしは、鬼中佐と呼りし、姓は廣瀨名は武夫、頃は三十あまり七年の、三月末の廿七、闇を冐して西の海、黄金威遠の砲臺を、右と左に仰ぎ見て、進む必死の決死隊、其れと見るより敵艦は、すは敵なりと驚きて、探海電燈ひらめかせ、射手を揃へて散々に、打出す大砲の彈丸は、雨霰かか白雪の降り注ぐが如くにて、千雷走り萬雷の、轟き渡る其の中を、物ともせずに雄々しくも、港の口に進み寄り、中佐は杉野兵曹長に、兼て積み來し爆藥に、點火の任を命じけり、忠勇義烈の兵曹長、艇艙に下りし其の刹那、敵の水雷命中し、火藥は點火を待たずして我手用ゐず爆發す、任務も己に遂げたれば、其の本船を乘

り棄てゝ、端艇に兵士を移らしむ、其の時一人の兵曹長杉野孫七見えざれば、中佐は聲をはり上げて、杉野何處と呼はりつゝ戰友思ふ眞心に彈雨の下も打忘れ、三度船内搜索し、福井丸の甲板に、呼べど呼べど聲はなし、探れど搜せど影はなし、風は怨みて浪怒り、照らすも凄し探海燈、髪逆立つて空仰ぎ、無限の哀涙含みつゝ端艇に移る其の矢先又もひらめく探海燈、敵彈雨と降り注ぎ、彼處此處に落ち來るを、怒りの眼凄じく降り中佐は双手を擴げつゝ身を以つて兵士を救はんと、多數の兵士をだきふせぬ、此の時敵の一巨彈、空を掠めて飛來り廣瀨中佐を倒しけり、立つ血烟水烟、今までありし軍神の、あゝ勇烈の其の

姿、姿は見えずなりにけり、血汐漂ふ艇内に、殘るは哀れ肉一塊、あゝ一片の此の肉は、是れぞ忠勇武烈なる我が軍神の面影ぞ、よしや其の身は朽ちたるとも、其名は朽ちじ千代八千代、廣瀬武夫と云ふ名こそ、永く青史に刻まれて、實に軍人の龜鑑ぞと、後の世々まで香ばしく、高き譽れをとり〴〵に、共に世界に歌はれん、共に世界に歌はれん。

十九、月下の陣

宵の篝火影うせて、木嵐吹くや霜白く、夜は更け沈む廣野原、駒も蹄をくつろげず、音なく冴ゆる秋の月、草葉の露は玉を縫ひ、夕果敢なき秋風も、止みて何時しか虫の音の、何を謠ふか叢らに、楯を褥の武士は、明日とも知らで草枕、夢は何處を廻るらん、茲に今宵は宿り木の身は未だ解かぬ鎧下、上行く雁に夢破り、濺に思ふ故郷の、雲井遙かに掛る月、國を思ふの誠心に、家をも如何で忘るべき、只身一つを無き數に、入る西山の月影を、水にむすびて明日はまた、駒の手綱を搔とりて、敵營を指して驀直、花々敷くも戰はん、夜はほの〴〵と明渡り星もかくれて横雲は、茜に染めて朝ぼらけ、いなゝく駒の勇ましく。

二十、水雷艇

春猶ほ寒き渤海の、空には殺氣みなぎりて、深けゆく月に光なく、沖の荒浪音絶えて、千鳥も眠るうしみつの、闇にまぎれて水雷艇、目ざす敵艦沈めずば、再び生きて歸らじと、舳先に荒浪蹴破りつ、艦に白泡踏みたてゝ、進むや何れ旅順口、怒龍の蟠り隙もなき、我が急擊に敵艦の、見よや旗艦と頼みける、レトウキサンを始めくしッエザレウキッチにバルラダ艦、音凄じく沈めたり、雲に聳えし敵艦の哀れや今は影もなく、世界を動かす勝閧は、天地も崩るゝばかりなり。

我國水雷天下奇　敵艦雖レ堅不レ得レ支
山壑如レ崩海濤湧　一擊龍驤虀粉時

あゝ勇ましゝ、我が水雷艇隊よ、汝の譽れは我國の、光と共に限りなく、共に世界に歌はれん、共に世界に歌はれん。

二十一、梶村候補生

敵の頼める旅順口、戍りは如何に堅くとも、要害如何に嚴しくも、落ちざる事はあらざらん、いざや進めと我が艦は勇氣を皷して進みける、時は如月八日なり、天地も動かす我艦の、猛烈きはまる砲擊に、敵は

忽ち敗北し、港をさして逃げにけり、卑法ぞ返せ免さじと、追ひつゝ進む我艦に、明くれば九日朝まだき、敵の主力と頼みける堅城鐵壁の三艦は、音凄まじく沈みたり、尚も進んで我が艦は、殘んの敵艦沈めんと、勇みて進む急擊に、窮鼠却つて猫を嚙む、逃ぐるに道なき敵艦ば、狼狽してや發ちけん、散彈來り誤つて我が初瀬の艦を打ち、海軍少尉候補生梶村久夫を倒したり、されど屈する彼れならず殘念ロスケと聲高く、一喝叫びて勇々敷も、名譽の戰死を遂げにける、あゝ勇敢ぞ牡烈ぞ梶村少尉候補生、一死を以つて國の爲め、盡したりける功勳は幾千代かけて、香ばしく、後の世までも歌はれむ。

二十二、勇敢なる兵士

三月末の廿八日、夜もほの〳〵とあけのそら、東雲きざす朝まだき、敵のありさま探ぐらんと、進むは何れ定州城、打ち來る彈丸は雨霰、わが斥候の一隊は決死の勢ひ凄まじく御國の爲めと奮鬪す、此の時一人の一等卒、狙をつくる一刹那敵の彈丸飛び來り、彼が弓手を貫ぬけり、彼は屈する色もなく、姿勢正しく尚狙ふ再び飛び來る彈丸は更らに右手をば打貫きぬ、左右の腕うたるゝも、凝視めし君の眼ざしは、怒りの炎もえたちて斃るゝとても放さじと、握り詰めたる表尺は、尚

も敵をば狙ひけりあゝ勇ましき一等卒、又も飛び來る彈丸に、むざんや久保一等卒、遂に果敢なくなりにけり、あゝ勇ましき一等卒、死して後止む心ざし、朝日に匂ふ山櫻、櫻の花と諸共に、赤き心を世に留め、日本武士の鑑ぞと、稱へられるも勇ましく、譽は永く傳はらん、

二十三、山櫻

大和の國の春風に、今を盛りと咲き匂ふ、我が敷島の山櫻、異國の風に散さじと、皇國の爲めに死を忘れ、進む兵士そ勇ましゝ、翳す劍の束の間も、君を忘れぬ兵の、赤き心は櫻花、花と其の香を競ひつゝ、雨

と降り來る彈丸も、閃く劍の電も、物の數とはなさずして、晝は汗馬に鞭を上げ、夜は曠野に露營して、進むに猛き兵の、世にも稀なる忠魂は、鬼神とても泣かすなり、矢猛心の一念は、岩をも徹す桑の弓、獅子奮進の勢に、敵する國のあるべきや、花なき里に花咲かせ、旭に匂ふ山櫻、さくらの花と諸共に、綾に畏こき皇國の、御稜威を世界に輝せ、御稜威を世界に輝かせ。

二十四、螢雪

夕の電朝の露、寔や人の一生は、彌生の春の櫻花、其の花よりも尙

脆し、然れば昔の人々が、浮游に比して人命の、測り難きを歎ぜしも
また無理ならぬ事ぞかし、今は幼き家の子も、何日か頭に霜を置き、
腰は梓の弓となり、老の坂路は杖を曳く、身ともなりなば何事か、成
し遂ぐる事のあるべきや、日頃の懈を思ひ出し、如何に後悔なせばと
て、駟馬も逐ふ事叶ふまじ、昔朱文公も此の事を歎きの餘り口吟む、
其の詩を玆にしらべなば、

勿謂今日不學而有來日
謂勿今來年不學有來年
日月逝矣歳不我延
嗚呼老矣是誰之愆

されば人々心せよ、時計の針の絶間なく勤め勵みて怠らず、甚じき功

績なしてこそ、人と生れし甲斐はあれ、學の楫、失はず、心を注げ諸
共に、勤め勵みて撓むなよ精神一到何事か、成らざる事のあるべきや、
千辛萬苦も嘗盡し、芳しき名を遺すこそ、皇御國の民ぞかし、學べや
學べ家の子よ、顧みもせで學ぶべし、顧みもせで學ぶべし。

二十五、笠置山

嗚呼忠臣と世の人の仰ぎたふとむ橘の、花の香りの古へも、忍ぶに今
はいと遠き、御醍醐帝の大御代は、武門の族や五月蠅はし、螢火なせ
ど世を照らす光も持たずなかなかに、人の心を亂しつゝ、すめら御國

に定れる、大義名分うち忘れ、ほしいまゝなる振舞に、朝權いよ〳〵衰へて、天津日嗣の御光りは、遮さる雲にへだてられ、射照とほらず成にしを、帝は武く雄々敷も、斯かる雲霧打はらひ、世を平かに安けき古へ振りに返さんと、御心碎き給ひしも、流れ久しき惡弊の、封建制度に馴れし徒は上を輕しめないがしら、下を苦しめいたはらず、世は苅菰、亂れつゝ、麻とをつるゝ時なれば濱の眞砂の數多き臣の中にもいさぎよく、命さゝげて君の爲め屍さらさん者もなく身を打捨てゝ國の爲め、力をつくす者とては、絶えてなかりし其の時に、河國の國に其の名さへ、高く聳えし金剛山、其の麓なる村ざとの、蓬茂れる草

の家にかくれ住ける忠臣の、あるよし遙か雲井まで、聞に渡れば畏くも、召出せよとみことのり、下るまに〳〵ゆくりなく、笠置の山に岩かねのこごしき道を分け上り、心の駒に鞭當てゝ、進みまうでし其の人は諸兄の王の子孫にて、名は正成と名乗りつゝ、巖とかたき楠を、家の名となし心をも、堅く固めし大丈夫の、御代安かれて祈りつゝ、いざ事あれば家も身も、君にさゝげて一筋に、臣たる道をつくさんとかぬて思へば今更らに、我身にあまる面目と喜び勇み百しきの、宮居にまうで跪づき、ひたとひれふし謹みて、勅命をぞ待にける、やがて帝は藤原の藤房卿を召たまひ、叡慮の程を細々と、宣せ給ひて正成に

此れを傳へと仰せらる、藤房卿はかしこみて、御前しりぞき出來り、かたちを正しおごそかに、やよや正成よく聞けよ、汝も兼ぬて知る如く後鳥羽院の御宇よりは、天下大いに亂れ果て鎌倉いよ〳〵增長し、稜威おとろへ行くまゝに、御政事はつゆばかり叡慮のまゝにならずして、天下あれどもなき如く、それのみならず三帝を、遠き島根にうつしゝは、皆義時のなすわざぞ、其の子孫たる高時が、今又君にさからひて、恐れ多くも玉體を困苦に沈めまつるこそ、憎みても猶ほにくむべき、鎌倉方の仕業なれ、斯かる困苦に在ますも、御身をいとひ玉はずに、下萬民を救はんと、旦暮宸襟痛められ、如何にもなして虐臣を

誅せんものと一向に御心くだき給へども是も叡慮に任さねば、今に詮術なきまゝに、汝をこゝに召出し賊を亡し大御代を、昔に返す術あらば聞し召さんと仰せらる、つゝむ事なく速に勅答あれと言葉さへ最とさはやかに傳へらる、正成おそれかしこみて、是れは有難き勅語、賤しき身には候へど皇國に生ひし民なれば、我が大君の御爲めには、身を思はで盡すこそ、臣なるものゝ道なれと、兼ねて思へば身はたとへ、山に倒れて草むすも海に沈みて屍をば、水屑となすも君のため、など惜むべき我が生命、さて戰は兵より計り事こそかなめなれ、强きを以つていふならば我が六十州の兵あるも、武藏相摸の二州には、いか

で勝べきやうやある。去れば今度の戰ひも、我が計略をめぐらして彼をはからば如何程の大敵とても恐れんや、然はあれども勝敗は、常なきのものに候へば、よしや一時ば敗るとも、かりそめ事にみ心を、挫かせ給ふことなかれ、正成此の世にある中は必ず、賊を討ち定め、御心安めまつらんと、勅答すれば帝にも、いたく喜びましく〳〵て、只何事も正成の、心に任せ置くべしと、厚き御言葉給はれば、嬉しき胸に溢れつゝ、手の舞ひ足のふみどさへ知らで喜ふ眞心は、色に見えつゝ大丈夫の、誓ふ言葉によどみなく、流れて清くいさぎよし、やがて正成いとま乞ひ、身を故郷に引返し心の色の赤坂に、城を築きて事あら

ば、こゝに御輦迎へんと、心のうちにはかりつゝ、笠置を辭して歸りしは元弘元年八月の、半も過ぎて明方の、空に薄雲殘れるは、ものゝふの身の寶なる、弓張月と知られけり。

二十六、七郷落

世は苅菰と亂れつゝ、茜さす日もいと暗く、蟬の小河に霧立ちて、隔ての雲となりにけり、あら痛ましや玉兎る裏に明暮宿直せし寶美朝臣に季知卿、壬生澤四條東久世其の外錦の小路殿、今は浮草の定めなき旅にしあれば駒さへも、進み兼ねてはいばえつゝ、降りしく雨の絶え

間なく、涙に袖の濡れはて、是れより海山淺茅原、露霜分けて芦が散る、浪花の浦にやく鹽の、からき浮世は物かはと、行んとすれば東山、峰の秋風身にしみて、朝な夕なに聞きなれし妙法院の鐘の音も、絶えて今宵は哀れなり、何時しか暗き雲霧を、拂ひ盡して百數の、都の月をし愛で見給ふらん。

二十七、高德題櫻

麻を亂せる如き世に、四方の草木も已がじゝ、靡き背きて定めなく、大君さへも禁庭に、とゞまり給ふことならず、隱岐の國へと行き給ふ

頃は元弘元年の、春の彌生の頃かとよ、鸞輿備前を過ぎ給ふ、時しも兒島高德は、忠義一圖の心より、帝を奉じ險に據り、再び旗を擧げなんと、圖りし事のなら坂や、遺憾の心やる瀨なく、衣を變へて身をやつし、一度帝に面のあたり、謁へて己が眞心を、告げ奉らんと思ひしも、其の隙なくて夜の中に、難なく御館へ忍び入り、櫻を削り筆執つて、

天莫レ空ニ勾踐一　時非レ無ニ范蠡一

二句の唐詩書きつけて、赤き心を示しける。夜はほのぼのと明け放れ護衛の兵の之を見て、斯くと帝に奏すれば、帝は之を讀み給ひ、不忠の輩多かるに、あはれいみじき勤王の、臣もあるかと御心に、喜び給

ふぞ傷よしきされば今猶ほ敷島の、大和心と櫻花。花に思ひを掛卷も尊き御國の龜鑑そと、譽むる其の名も香ばしく、朝日と共に輝かん、朝日と共に輝かん。

二十八、月華

月と華とは昔より誰が樂まぬ人やある、誰が喜ばぬ人やある、さは去ながら月華も、心につれて憂きことの、種となれるも多からん、足柄山の松風に、吹き合せたる簫の音も、是れより遠く奥州へ、軍と云へば身の末は、死ぬか生るか白河の、關をば雲やへだつらん、勿來の關の春の暮、駒をとゞめて眺むれば、都の空は華曇り、鎧の袖に散りかゝる櫻の雲は將軍、鬢の霜より尙白し、戟を枕に夜は馴れて、秋哀れも知らざれど、越山の月のいと白く、雲間を渡る雁かねも、故郷の空に歸るぞと、思へば我れも懷かしく、華の都は荒れ果て、何處が我が身の置き所、今宵一夜の宿賴む、櫻の露に袖濡れて、滅亡時に極りて、平家の末ぞ悲しけれ、佞人原の讒により諫の言葉容れられず、二人ともなき賢臣は、筑紫の浦の詫住ひ、御衣を拜して涙なる心の底は如何ならん、我が君今は賊の爲め、遠き島路に行き給ふ、無念の心やるせなく十字を記す櫻の木、我が赤心を申さんに、などか他言を要

すべき、月の光を華の香や、幾萬年を經るとても、更に替りはなきなるに、常なき物は世の治亂、月を見て醉ひ花を見て、眠れる春の手枕の、只一筋の夢の間に移る興廢存亡の、世の成行ぞ無常なれ、若も世間の拙なくて、上には君を煩はし下には民を苦勞させ、國の亂るゝ其時は月の光は輝くも華の色香は匂ふとも、など樂みのあるべきぞ、されば世間の諸人よ、赤き心を引なこし、國の光を東海の、月より尙も輝かし國の譽をみよし野の、華より尙も芳しく、するこそ今の勤なり、誓て斯くもなせし後、樂しき月見をしてみたや、樂しき花見をしてみたや。

二十九、春日野

春日野に、下萌え出づる若草の、歳の戸明けて秋津國、霞渡れる片岡に、月は殘りて雉子鳴く、明けの友鶴君が代の、壽き祝ふ初聲に、南山の、盛り久しき松竹の、落葉掻き取る諸人の、遊ぶ小川の菊の露、流れも匂ふ五百年の、齡を國にゆづる葉の、朝日輝く富士の峯、是れぞ蓬萊山とは謠ひつゝ、七方の峯は影を湖水に浸し、木々の梢も荒磯の、月海上に浮んでは、兎も走る浪の上、緑樹蔭に沈んでは、魚木に登る風情かな、五雨十風の御代の春、四海に靡く時津風、君が治むる

御代なれば幾萬代迄も代らぬ御代こそ目出度けれ。

三十、梅が枝

春は先づ咲く梅が枝に、谷の戸出る鶯の、聲も聞えて高瀬掉す、佐保川原に繰掛て、最と珍ら敷き岩躑躅、言はぬ思ひの色にしも、井手の山吹藤咲いて、松にも花を春日野の、綠榮ある若草に、荒れたる駒も夏來ては、御法の門に兼ねて後生を願はざる、人の心が卯の花や、橘匂ふ五月雨に、山郭公音づれて、いと昔は戀衣、重ねて袖を濡すらん闌省の花の時、錦帳の下、盧山の雨の夜草庵の中と賦し置ける、さ

れば詩の心にも、同じ思ひの菅莚、敷き忍びたる淋しさを、種子とは知らで萩を、植えて悔敷き庭の荻、薄も月も穂も出でゝ、亂れ〳〵しあだし野の、草葉に置ける露の身の、消えぬ便を松虫の聲さへ今は霜枯れて、雪白妙に故郷の、哀れと云へる人もなし、恨めしの浮世かな、嗚呼恨めしの浮世かな、諸行無常の春の花は、是生滅法の風に誘はれ、生滅々己の秋の月は、寂滅爲樂の雲に隱れ、僅かに此の世に留まらず、併し又浮身を捨てんとは思へども、流石又輪廻の浪の立つ間には、其面影が身に添ひて斷る斷れぬ煩腦の、長き氣綱に繋るゝ身こそ悲しけれ、彌陀賴む人は、雨夜の星なれや、雲晴れねども西へ行く

極楽は千萬億土と云ふなれど、又越し浮雲と聞く時は、爰を去る事遠からず、有明は唯其儘の姿にて、月の光は妙法の、風に任する身こそ安けれ。

三十一、武藏野

武藏野に、草は種々多けれど、摘菜にすれば扨も少し、皆人は若き時より、唯徒ら事に日を送り、才智藝能なき人は、寶の山に入り乍ら、空敷く歸るが如くなり、偶々人間界に生れ來て、眞如の玉を磨かずば人と生れし甲斐もなし、只人よりか淺く思はれて、犬の歳老ゆるが如

くにて、朽ち果つるこそ無念なれ、又何時の時にか磨くべき、賴まれぬ世にもあるかな、月鼠そよぐ草葉の露の命なれど、假分高位長者の身となりて、七珍萬寶滿ち滿ちて、榮華に誇る樂も、一夜の夢の如くなり。觀樂極りて愛情多しと、古人の文に記さる身、去ればこそ生々世々の樂も、心の中の月や花、之を樂む人もなし、會者定離盛者必滅の世の習ひ、春去り秋は蟬の聲さても果敢なき浮世かな、引き寄せて結べば草の庵にて、解くれば本の野原なり、少しきを足れりとも知れ滿ちぬれば、月も程なく欠けて行く、十六夜の空や人の身の上と知られたり。

三十二、迷悟もとき

世の中に迷ふが故に三界は暗し、一心悟れば十方世界は廣くして、地獄の餓鬼も我れにあり、彌陀も淨土も他にあらず、佛とは何を岩間の苔衣、唯其の儘の姿にて、慈悲より外に宿心はなし、唯だ世の中に、腹は立つとも言葉は殘せ、言葉少なく淳直にして、濁る心を澄やかに持す、何れ人には情あれ、情は人の爲めならず、廻り〳〵て小車の我身の爲めとなる、されば古人の言葉にも、聖人は人、謗らず、仁者に敵はなし、大海は塵を撰ばず、枝高きとて風にもろき木はあだ折れぞ

する惡まる人には猶ほも良くして見よ、後は深き友達となる、身の善惡は人の上にて我が身を磨け、友は鏡となるものぞかし、我が善きに人の惡きはなき物よ、唯だ何事も善惡を思ふ心を捨てゝ見よ、何國の果にも住みよかるべし、我智我慢我力我心を捨てゝ見よ、彌陀頼む身はさても空蟬の、藻脱け果たる身こそ安けれ。

三十三、蠟蛾

倩有爲轉變を觀ずれば、花も紅葉も一盛り、況んや人も一盛り、人の齡が花に似て、咲くは遲ふて散りやすく、散り行く花は根に歸る、花

は散りても木さへあらば、又來る春は枝にもとりて匂ひ來る、鳥は古巣に歸るとは云へど、夫れ人間は死して二度跡に歸らぬ死出の山、如何なる人の蹈み初めて、行くも歸るも涙川、親の別れに子を列れず、又子の別れに親添はず、獨り生れて獨りゆくこそ、唯冥土の營みは疑ふ心あらずして、常に唱へし念佛も、是は淨土の實なり、去ればにや茲に一つの假令あり、蠶蛾と云ふ虫は如何なれば、己が姿になき虫を其れを我が巣に集めつゝ、心を盡して祈りせば、我れに似る事あるぞかし、我等如き迷ひの身も、斯程に深く祈りなば、などか兆のなからん、ゆいしんの淨土、こんしんの彌陀と聞く時は、十萬億土の極樂も、爰を去ることと遠からず、皆人は彼の理を知らずして、明暮罪を造るぞ果敢なれ、罪は來世の火の車、善は淨土の蓮なり、偶々此世に人間衆生と生れ來て、後生前生を願はずば、いつの世にかは浮ぶべき。

三十四、老蘇の森

數ならぬ身にさへ年の積る哉、老は人を嫌はざりけり、と連ね置かれし言の葉が、今身の上に知られたり、去れば此の世に生れ來て、生老病死の四つの苦を、逃るゝ人は更になし、彼の四つの苦の中に、何れ差別はなけれども、中にも老苦が哀れなり、其の古へは我れも又た容

顔美麗の姿にて、月や花かと人にも見られ、假初の道行くふりに花をも送られ、文玉章を取替し、笠のはづれの隙よりも、人を見初むる目元まで、嗚呼恥かしやと思ひし事も、夢かと覺めて昔なり、去年より今年昨日より今日と、衰ふる姿見る度に、くやしき事の增鏡、涙に曇る哀れさよ、去ればこそ詩にも歌にも記さるゝ、白髮重來一夢の內に昨日まで乘りて遊びし竹の駒、今日は早や老の坂行く杖と賴まん、又は古歌にも、

替り行く鏡の影を見る度びに
老蘇の森の歎きをぞする

と連ね置かれし言の葉も、今身の上に知られたり、只だ何事も人間の世にあるは假寢の、夢か現のあひだなり。

三十五、大楠公　第一段

于時建武三年五月初旬、足利將軍尊氏、同く左馬頭直義大勢を引卒し都へ攻上る趣き、新田左中將義貞急使を以つて奏聞ありければ、主上大に騷がせられ、楠判官正成を召され、急ぎ兵庫へ下降して義貞に力を合せ、合戰すべしと仰られければ、正成畏つて奏聞しける樣、尊氏已に筑紫九ヶ國の勢を卒ひ、上洛する事なれば、定めて戰は雲霞の如

くにぞ候はめ、味方の疲れ果てたる小勢を以つて、機に乘たる大勢に懸合、尋常の如く戰はゞ、味方の敗北は鏡に懸て見る如く、急ぎ新田を召させられ前の如く山門へ御臨幸あらせらるべし、左もあらば正成も河内へ下り、畿内の勢を以つて川尻を差塞ぎ、尊氏を都へと進ませて、双方より兵糧の道を斷切らば、敵は次第に衰ふべし、其の機に乘じ、新田は山門より推寄せ、正成は搦手より攻上らば、朝敵を一戰に滅さん事、何の疑か候はん、新田も此の所存と存候得共、敵を眼のあたりに受け乍ら、軍もなさで引上ん事、人の思はくも如何ならんと、終に兵庫に支へしならん、合戰は兎も角も、軍は始終の勝こそ肝要なれ

能々思慮をめぐらせられ、公義を御定めらるべしと、奏聞ありければ防門の宰相清忠申さるゝ樣、正成の云ふ所其の謂れなきにあらざれども、征討の爲めに差下たる節度使が、未だ戰ひを爲ざる先に帝都を捨て一年の内、兩度迄山門へ御臨幸あらん事、一つは帝位の輕さに似、一つは官軍の道を失ふなり、凡そ戰の始めより味方の小勢を以つて敵の大勢を責惱したるは幾回ぞや、是れ武略の勝れたるにあらずして全く聖運の天に叶へる所以なり、然れば戰を帝都の外に決し、鐵鉞の下し滅さん事何の仔細あるべきぞ、只だ時を移さず正成罷下るべしと仰出されける、正成今は詮方なしと、五百餘騎を從へて五月十六日都を

立て、急ぎ兵庫へぞ下りける、正成の一子正行は今年十一歳なれども父の決意を察せられ、何國迄もと從ひ行く、正成思ふ仔細の有るなれば、櫻井の宿に於て正行を膝元近く召寄て、夫れ獅子と云ふ猛獸は、子を產みて三日を過ぐるにあたり、數千丈の絶壁より、谷底深く投捨る、其の子勇猛ならば、中より削ね歸り無益の死をなさぬと云へり、況んや汝も人界に生を得て己に十一歳にもなりぬれば、父が敎は能く守るべし、此度の合戰は天下安危の定る所、我れ討死したる其の後は尊氏天下を縱横し叡慮惱まし奉らん、汝正行よ此の不義の勢に恐れ身命を助からん爲め、多年の忠烈を捨て彼に服從するなかれ、一族郎等の者、生存へてあるならば、金剛山に引籠り敵寄せ來りなば、命を由基が矢先にかけ、義を紀信が忠に比し必ず、一歩も退く事なかれ、此肌の守は都責めありし時、下し賜ひし綸旨なり、是を汝に讓るべし、必ず父が志を繼ぎ、帝に忠義を盡しなば、是こそ親への孝なりと申し含めて正行の顏の、あたりに手を當て、是が此世の見納めぞと、思へば猛きますらをの、心も今は亂れ髮、かき上げつゝも幾度か、振り返り見て泣々も、名殘多けふ分れげに、車の蹄衰を觀察し、一子を殘してなき跡までの、義を勸む心の内こそ殊勝なれ。

三十六、

第二段

去程に正成兵庫に着ければ、義貞對面し給ひて、叡慮の趣尋ね問はれける。正成承りて勅諚の樣と、己が所存を悉く語りける、時に五月二十五日煙波淵々たる海の面、十四五里計が程に數萬の、兵船帆を擧げて寄來る樣は、左も赤壁の戰ひ黃河の兵も是には過ぎじと思ふ所に、須摩の上野と鹿松の岡、鵶越の方よりも二つ引兩、四つ目結ひ左り巴等の旗、五六百旒が程朝嵐に飜し、雲霞の如く寄せ懸けたり、正成之れを打見て舍弟帶刀正季に申樣、敵前後を廻る味方た陣を隔てたり、今は遁れぬ所ぞと、先づ前なる敵を追まくり、後の敵と戰はん、正季是を承り、我手七百餘騎を前後に備へ、大勢の中へ割つて入る、直義の兵者共菊水の旗を見て、能き敵なりと思ひければ取籠て討んとしけれども、正成正季東より西へ切つて通り北より南へ追靡け、能き敵を見受ければ、駈け並べ、組で落ては首を取り、雜兵の奴輩は、一太刀打てかけ散し、正成正季と七度合ひ七度分るゝ其心、偏に直義に近付いて組で討んと思ふにあり、終に直義の五拾萬騎は正成が七百餘騎に追立られて、亦須摩の上野の方へと引返す、直義の乘たる馬はを蹄を踏立て、ひるむ處鏃を正成が軍勢早くも足を見とめ、いざ討取らん

馳寄るを、藥師寺十郎次郎只一騎、蓮池の堤にて返し合せて、駒より飛んで下り長刀の石突を取延て、懸る敵の馬の平首むなかひの引廻し切つては刎たふし倒しては刎ね瞬く暇に七八騎が程は切て落す、其間に直義は馬を乘替てはるばる落延び得たりける、尊氏是れを見て荒手を入れ替へ、直義を討たすなと下知あれば、吉良石堂上杉の人々六千餘騎にて湊川の東へ走出、て跡を切らんと取卷ける、正成正季又取て返し、此勢に渡り合せ、打つ打たれつ火花を散して戰ひしが、味方も次第々々に打たれける、殘る兵は僅か七十三騎にぞなりにける、此の小勢にて敵を打破り落なば落つべかりけるを、正成都を出てより思ふ

所存のありければ、皆打死と覺悟して湊川の北に當りし一村へ、七十三騎揚げて、休うふ内に一族は、軍兵共と諸共に腹掻切つてぞ失せにける、正成正季に打向ひて申樣、そも〳〵最後の一念に依り、善惡の生を引といへり九界の間に何れか願ひなると問ひければ、正季ほゝぞゑみ、七度人間に生れ來て朝敵を滅さんと思ひ候へと、申ければ正成いと嬉しけなる氣色にて、罪業深き惡念なれども、我も箇樣に思ふらん、いざさらば同じく生を替へ此の本懷を達せんと、誓つて兄弟差違へ、一つ枕に伏しにける、嗚呼此の最後こそ、實に武士の鏡なれ、實に武士の鏡なれ。

三十七、島原合戦　第一段

國を申さば肥後の國、在所記せば割府といへる、扨も在所に赤星源次郎綱明とて弓取一人をはします、其比肥前に深く味方召れける、其年の年號申せば天正九年辛巳の年、比は卯月七日と申すに、肥前の國主龍造寺山城守隆信方より使者の參る、いかに申さん赤星殿、主君の爲め誠に肥前に味方召さるゝ者ならば、人質を給はれとの御諚也、赤星言葉に國主の御意とは申せども、誰をか質に參らせん、其時使者の言葉に、承れば歳は十四に成らせ給ふ松若殿とて若のあるよし、肥前屋

形に隠れなし、彼の若を質に給はれ、赤星殿とありければ、赤星言葉に、若を一人持つては候得共、彼の若を質に渡しては、跡の歎きは如何せん、去れど又、國主の御意には叶ふまじく若を召寄せ御尋ねあれば、若の言葉に、某國にあるならば、二人の親の御奉公又は國の替りとなるならば、質に渡らだ事御心安く思召せ、頓て御供の士十八人を召連れ肥前の如く御渡なされ、佐賀の屋形に伺候有るぞ中々物の哀れなり、未だ三日も過ぎざるに重ねて使者の參る、いかに申さん赤星殿、承れば年は八つに成らせ給ふ安千代殿とて姫の有る由、肥前屋形に隠れなく未だ幼少なれ共彼の姫を、質に給はる物ならば、若の所

は國の如くは返すべきとの御諚也、赤星言葉に扨は中々若を一人出してさへ跡の歎は如何にせん、況してや幼少の姫を質に出しては跡の歎は猶増さる、去れども國主の御意には叶ふまじと姫を召寄せ御尋ねあれは、姫の言葉に、「二人の親の御奉公、又は御兄上様の御身代りと成るならば、京鎌倉までも登るべし、況んや肥後と肥前は近き間と承る、質に渡らん事御心安く思召せとて、頓て女房六人士二人を召連れて肥前の如く御渡りなされ佐賀の御内に兄弟共に伺候有るこそ何より物の哀れなり、是は扨置爰に又、肥前に於てつれなき士、隈部左馬介親興と申せしは、三とせ以前赤星殿と境の論を召れしが、痛はしや

隈部殿、召負なれば赤星殿より三百餘町を踏み取られ、無念至極はなかりける、如何にもして赤星に腹切らせんと思ふ折節なれば、是こそ能き折柄と心得、隆信殿に作り文を上げ給ふ。隆信殿は彼の文を披見なされ、赤星は肥前の兄弟の子供を質に渡し、其上ながら薩摩に味方肥前に二張の弓を引との文なれば、隆信大に腹を立て、其の儀ならば肥前に於ても法度の仕置に任せ生磔と御意下る、痛はしや兄弟は、肥前屋形に三日も置ずして、肥前と肥後の境なる、南の關竹の夜原に、送り有るこそ何より物の哀れなり、若の言葉に、兄弟共に御殺しあるものならば肥前屋形にて只一大刀に御殺しあるべし、御殺あるとても

士が塀垣越へて隱れ忍びは致すまじ、士は疊の上に生れ來て、野原にて死するが本道とは承る、夢にも知らぬ野原にて面は月日晒されて長く浮名の立と思へば、是れ一つのいかゝなり、只今敵と引組んで討死致すものならば、箇程に物は思ふまじ、如何に申さん隆信樣、某は男の身にて御殺あるとても苦しからず、幼少の妹は、國に御返し給はれと、日には三度の詫をなす、姫の言葉に、自らは女の身にて苦しからず、兄の所は赤星が家の世繼の事なれば、國に御返し給はれ隆信樣と、日には七度の詫をなす、隆信御諚に、如何に兄弟、科なき隆信を恨み給ふな、謀叛心の父の赤星を恨み給へと御意下る、姫の言葉に

科なき隆信樣も恨み申さぬ況してや父の赤星も恨み申さぬ、中より作り文を上げたる隈部殿こそ今生後生の恨みあり、若の言葉に、如何に安千代、何某の子孫と云ふて女にこそは生れ來て人を恨みては如何にせん、死出の山三途の大川左京が橋迄も、一つ道ぞと喜び給ふこそ哀れなり、若の其日の裝束は、先づ肌よりは白地練絹、上には紫染にひはだ色のくゝり小袴しつかと召れ、十八人の士を御側に召れ、いかに旁々呼を靜めて聞き給へ、某兄弟は隆信樣より、身に覺なき科に上意の宣ふ也、迚も上意は逃るまじ、御身達は暇取らする、何國の樣にも落行て、我に增したる剛き主人を賴み給へと仰せける、十八人

の士は頭を地に附け皆一同に言葉を揃へ、嗚呼情なき若君様の御諚やな、士が強き時は主人と頼み、今弱きとて君を振捨る法やあらん兎にも角にも若君諸共にと申上れば、若君斜に悦び、十八人の士に御盃を給はりける、爰に又姫の、其日の出立には、先づ肌よりは十二小袖を召されける、上着は其の比、肥後に流行りし白糸小袖召重ね、たけと一世の黒髪は月の輪形にゆい給ひ、まげの糸にてみふし留め、頓て六人の女房達を御側に召され、如何に旁々鳴りを静めて聞給へ、自ら共兄弟は、身に覺なき科に上意の宣ふなり、迚も上意は逃るまじ御身達は千に一つも隆信様より御暇給はる物ならば、國の如くに落行

きて、二人の親の御前に參り、自分兄弟斯々成りたる有様を、一事も殘らず申上げよと仰せける、六人の女房達は唯だ涙に咽びて誰も御返事申す人もなし、痛はしや彼兄弟は頓て檢使を御側に召れ、如何に檢使の方、はたの板は古より定る法西へ向るが、本道とは承はれど某兄弟は肥後の方へ向はれ給はれ、左もあらば割府の在所に、二人の親の有ると思へば、吹來る風迄なつかしや、いかに檢供の方と宣へば、檢使の方聞召され、當城は往古より、傳はる儀式はたの板は、東へ向けるは天下に恐れあり、御身達兄弟とても西へ〳〵と有ければ、痛はしや兄弟は扨は力に及ばずと、左右の手を差上げ、肥後の方を打

眺め、嗚呼なつかしや割符の御所と、七度招きてはたの板に召れける
こそ中々物の哀れなり、彼の兄弟は士の義理なれば、三日が間は小
歌拍子にて過させ給ふ、痛はしや姫君は未だ幼少の事なれば四日に當
る酉の刻、竹の夜原の朝の露と消え給ふ、若の言葉に如何に安千代、
未だ此の世にあるかなきかと聞給へば、答ふる者は竹の夜原の原暗き
磯打浪に空飛ぶ鳥の羽音計りにていとゞ哀れは增さりける、若君も次
第々々に衰へて七日に當る扨ても午の刻、竹の夜原の朝の露と消えに
ける、中々物の哀れなり、十八人の士は皆一同に肥前屋形に亂れ入
らんと思へども、多勢に無勢の事なれば、力に及ばず皆はたの板下に

立寄つて思ひ〳〵に清く自害を召されける、何より物の哀れなり、頓
て此由隆信殿聞召され、姫に附來る六人の女房達を御前に召され如何
に其方達は是れより暇とらする、何國の世にも落行て、思ひ〳〵に身
を雪げよと御意下る勝の前進み出で申す樣、嗚呼情なき隆信樣の御諚
かな、某二十の歳より御乳を上げにし姫君さへも御助けなき、數な
らぬ我れ我れ共に御暇給はる共、國に歸りて如何せん、思ひ〳〵に清
く自害を召されける、未だ惜かる歳は勝の前が二十七萬勝の前が二十
五千勝の前が二十一、小宰相が二十、小櫻が十九、小相が十六、何れ
も劣らぬ花盛り、夜半の嵐に誘はれて散て行くこそ哀れなり、頓て此

由割府御所に洩れ聞え、赤星殿聞し召れ、扨は中々是は又、夢か現か幻か、夢ならば覺めても行け、現ならば消えてもゆけ幻ならば暫しが程は松の葉色にも留れかしと、天を仰ぎ地に附して歎かせ給ふぞ哀れなり、割府の御所は寺々の、鐘の響も留まりて、長夜の響きと泣き暮す、是れは扨置き爰に又、肥前に於てつれなき士、隈部添島鍋島田尻の人々は、此の序に赤星が領分を知行にせんと、我が手三千餘騎を引具して、割府の御所を指して急がるゝ、頓て割府にも成ぬれば彼の御所を二重三重に取圍み、鬨の聲をぞ揚にける、赤星は此の由御覽なされ、扨は中々兄弟の小供を、無慚に殺され歎かせ給ふ折節、敵に攻められて、太刀も揚らぬ次第なり、さても力に及ばずと彼の御所に火を掛け天も霞を燒立る、住み馴れし割府の御所を、袖白雪と振捨て、八代さして落んとし給ふ所を、跡より敵は鬨の聲を揚げ、しげしげしとふて追懸る、是は扨置爰に又、赤星の郎等に上村兵部左衞門迚大剛の勇士あり、此由見るより主を討せては叶ふまじと、我手三百餘騎にて門外さして切つて出れば、肥前方大勢におろし合せ、如何に旁々某を如何なる者と思ふらん、赤星が郎等上村兵部左衞門とは某なり手並の程を人々見給へと、言ふより早く三尺八寸の大太刀を拔持て、大勢の中に面も振らず割て入る、追つ追れし請つ流しつ、三度の太刀

打四度の追ひ込み、五度の合戰、七八度目には、鎬を削り鍔を割り、切羽の金も、みぢんに成れと世にも烈しく爰を先度と戰ひしが、痛はしや向ふ敵八百餘騎にやみ〳〵と討れける、我が手三百餘騎は追々と討死す、今一太刀とは思へども多勢に無勢の事なれば、力に及ばず、小高き所に馳上り腹十文字に掻切り清く自害をしたりける、未だ惜かる年は二十八、傷まん人こそなかりける、赤星殿は此の隙に、八代さして落給ふ、八代の慈眼寺正法寺彼の兩寺を深く賴ませ給ひて、三とせの程は、終夜百萬遍を唱へて月日を送りておはします。

三十六、同

第二段

去程に赤星、斯くて三年も過ぎ行けば、赤星殿は德の口より夜船に召れ、薩摩を賴みに落ち給ふ、順風よければ帆を揚げて、程もなく出水米の津に着かせ給ふ、其頃の米津は島津義虎公の御持なれば、直ちに義虎公の御前に參り、如何に申さむ某は、肥後に於て割府の城主、赤星源次綱明と申す者なり、肥前に於てつれなき士、隈部左馬之介親與と云へる者の讒言に依り、隆信殿より兄弟の子供を無慘に殺され、其上敵つ攻められて未だ太刀も上らぬ次第なり、漸々是まで參り候也

何卒肥前に一度弓を引て給はれ、義虎様と有りければ、義虎公聞召されし、扨ては中々、世にも無惨な事を聞く次第かな、其の儀ならば是れより北に當りて、大口と云へる在所に新納武藏守忠元とて弓取一人おはします、彼を深く頼ませ給へと案内者二人召れ給ひ、早や米の津を御立なされ、夫婦打連れ髪は月日に晒されて裾は露袖は涙に打しめりつく〳〵と呉竹の世は、逆様に杖をつき、嗚呼兄弟の子供の事がいや増さる高に聞えし高鼻越を召れ、急がせ給へば程もなく菱刈衣大口に成りぬれば、直ちに新納武藏守殿へ對面有て斯次第を申させ給ひければ、武藏殿聞召され、偖も中々無惨の事を聞く次第かな、其儀ならば

是より東に當りて佐土原と云へる在所に、島津中務太輔家久公とて軍奉行のおはします、彼を深く御頼なされ、左もあらば數ならぬ武藏も島津の御馬の先にまかひ立ん案内者二人召連れ早大口を御立なさる、音に聞えし般若寺越を輕く召れ、眞崎五ヶ所を打通り、白鳥山を伏拜み野尻紙屋を過て急がせ給へば、程もなく日州佐土原に着かせ給ふ、直ちに中務殿の御前に參り、赤星が斯くの次第を殘らず申され給ひ何卒肥前に弓を引いて給はれ中務様と、涙と倶に頼みあれば、家久公聞召され、是れは以ての外の仰かな、當國は赤星殿とは矢崎合戰折大敵、肥前は味方なり、其儀無用と仰せける。赤星は是非に及ばず

涙と共に中務殿の御前を立ち給ふ。爰に又中務殿の御嫡子に又七殿として今年十三歳に成らせ給ふが赤星を哀れと思召し、直ちに父中務殿の御前に參り、いかに申さん父上様、國主が國主を頼むは世にある習ひ譬へ大敵也とても、人窮すれば本に歸る、鳥窮すれは懐に入るとかや、夫れ武士の習ひにて昨日の敵も今日は味方、今日の味方も明日は敵、何卒御加勢有つて給はれかし、左もあらば某も御供仕り御馬の先にて高名致さんと、勇み進んで有れば、中務殿聞召され、又七殿の勇氣を感じ其儀ならばと赤星を呼返し給へば、赤星は斜ならず悦び、直に中務殿の御前に參られける、頓て中務殿御諚にいかに申さん赤星殿、當

國は島津義久の領地ならば、某とても議定返事は致し兼ね、兎にも角にも義久公に御意を伺ひ、弓を引かでは叶ふまじと有ければ、悦び給ふ事限りなし、夫より佐土原小路小路に、島原責と觸れを廻せば、我れも我れもと進む士、七百餘騎とぞ聞えける、嫡子又九殿、三百餘騎御父子共に一千餘騎にて早や佐土原を御立なされ、急がせ給へば世は何事も勝目の坂を打過ぎて早や高岡を馳通り、去川に成ぬれば死出三途の川と打渡り、今日も又た日は高城と打通り、最早庄内都之城に着かせ給ひ、竹の下なる一夜の笹陣召れける、直に其夜は北郷一雲殿へ御内談召れしが、心得たりと觸狀を廻され給へば、先一番に小杉土持

北郷民部左衞門を始めとし、都合其勢一千餘騎にて、早や都の城を未だ夜深くも御立なされ、元服の渡りを三重町過れば、眞幸の峯を越へ人の中なる本路原、六道坂をも打ち過ぎて、心安くも通り山、牧の原をも下らせ給へば、早や福山の宮が浦にぞ着かせ給ふ、直に宮が浦々に、兵船二十餘艘を催し、宮が浦より御舟に召され、先つ一番に弓手に見えしは櫻島、妻手は見えしは源氏の氏神、正八幡を伏拜み捨て置かん濱の市、九里小濱や長濱の流れて出づる黒川や、嵐に花の數散りて加治木の里を眺むれば、世にも名高き蛇尾嶽、左の脇は南無藥師、茲に脇元別府川や、君に大崎龍が水、心岳寺とは是れとかや、浦吹く

風に帆を上げて、三船の明神伏拜み爰に嶮岨なかや落し、大磯小磯田之浦や、程なく行屋に着き給ふ、家久殿は直ちに屋形に召されて義久公御前へ參り、赤星の事の子細を、御申あれば義久公御諚に、士が世に落ちて國主を頼む世の習ひ、一度弓を引いては叶ふまじ、今度の戰大將中務殿に任すと御意下る、早方々へ島原寄せ勢の、觸れ書を御廻しありて、先づ一番に進む大將島津中務殿の御父子、御同名輝久北郷殿、樺山殿新納忠元鎌田寛政、伊集院久治同名肥前守加治木殿、入來院殿伊地知殿欵姓殿、佐多殿喜入殿根占殿菱刈殿、吉利殿吉田殿本田瀬戸口弟子丸宮里野村町田出羽守、中にも川田駿河守川上左京久堅

稲留左京猿渡右京、出水方には島津義虎公、同名伯耆守水谷植村大橋平田和州村田狩野介彼方〳〵を先として、都合其勢一萬三千餘騎、吉日を撰びて鹿兒島を出で、旗差物を朝日に輝かし、鶴丸山を跡になし音に聞えし水上坂を輕く召され、腰は掛けぬど横井原、間遙かの五本松君の心は實に清藤涼み松、伊集院六郎坂をも打過ぎて、城はなけれど城の町、急がせ給へば程もなく、市來港に着かせ給へ、一夜の宿陣召されける、大隅薩摩は遠國なれば肥後に合する旗が二十四本と聞えける、明れば市來港を御出立なされ、世に何事も勝目の橋をも打渡り華の五反田打過ぎて、薩摩山を二度と歸らぬ死出の山と打通り、佛の

前には有らぬ共、佛生橋をも打過ぎて、敵に向田川内川を三途の大川と打渡り、新田八幡宮へ御參詣なされ、此度貪慾無道の隆信を、何卒討せ給はれと、深く御祈願召れける早や川内を御立なされ夕日に向ふ暮橋や、五月半の麥の浦、高城の小路を打過て、西方阿久根を馳通り急がせ給へば程もなく、出水青屋に着かせ給ふ、義虎公の旗揃へ、米の津へ三日が間は軍の評議召れける、斯て三日も過行けば、家久公は御馬をば德の口へと廻さるゝ、兵船三百餘艘を一つに押寄せ、矢筈が嶽より吹下ろす、嵐と共に船漕出す、名所舊跡浦々詠めて面白や、先一番に夕部生れし、今朝見ゆるわらび島、君の御運は強き命長島、敵

の爲には獅子の島、瀬崎笠山三日月山をも跡に見て、駒は立ねど牧の島、寢亂れ髪のかつら崎、笛と太鼓はなけれども、神樂崎をも漕廻り君はなけれど御所の浦、時に渡せば今浦本浦唐木崎、境ひ二又そろを崎、柳の瀬戸も跡に見て、今日の日も早や暮羽鳥一夜の宿をからふ島夜はほの〳〵とあこふ崎、鴛は住ねど池の浦、名殘惜しくも姫の浦、三角の瀬戸を漕ぎ出て見れば、早や先手は島原の安德寺に陣を取り、是れは偖置き玆に又、鎌田寛政新納忠元、吉利吉田彼の人々は薩摩に於て物に馴れたる武士なれば天草島に打渡り、島衆五六人からめ取、案内者として島原陣にぞ渡さる〳〵、中務殿は此由聞召され大に悅び最

早軍の手當召れける先づ一番に鎌田寛政新納忠元、伊集院久治吉利吉田、彼の人々は一千五百餘騎にて、濱の出口の手當なり、稻留左京、猿渡肥前守一千五百餘騎にて水の出口の手當なり、加治木彈正三千餘騎にて大手の口に控へ給ふ、島津中務御父子、川上左京久堅、彼の人々は二千餘騎にて桑原の陣に籠り給ふ、平田和州村田狩野介は殘の勢を引連れて島原口をしつかと堅め肥前方より寄せ來る敵を、今や遲しと待ち給ふ。

三十六、同

第三段

去程に薩摩方は思ひ〳〵に陣所を構へ、龍造寺山城守隆信方へ使者を立て、案内乞ふて内に入り、此由斯と告ければ、薩摩軍衆が寄せてあるらん、大軍を催し唯安々と打亡さんと、早や六ヶ國に觸れければ、我も〳〵と進む士、先づ一番に隈部左馬之介、鍋島丹州、添島右衛門田尻某寺山陸奥守、野口能登守圓城寺美濃守、成松遠江守一族には小川武藏守、小宮源左衛門後藤家持、龍造寺家種此人々を初めとして、都合其勢六萬七千餘騎は時刻を移さず寄せて來る、龍造寺山城守隆信を大將として、九十三本の旗を摩かせ島原にこそ渡さるゝ、頓て肥前軍衆は薩摩方を一目見て、偖ては中々此度の合戰は、案にも違はぬ小

勢かな、いざ高珠子には有らぬ共、手の内にて揉まんと勢ひ荒鷹い小鳥をねらふて勇むが如くなり、薩摩方に於て島津中務殿、之を御覽じされ、如何に旁々あれを見よ、此の度の合戰物に譬へ見れば、籠の中の鳥、網代に籠る魚とかや、前には大敵後ろは大海、左右は巓石に圍まれて、洩れて行く樣は更になし、されど又中務殿は智惠第一の名將なれば、二心を懷かぬ其の爲に三百餘艘の兵船は皆な島原の高濱に引揚げ、悉く燒捨て頓て陣屋〳〵に觸れを廻し、此の度の合戰、薩摩に二度歸るとは思ふなよ、皆島原の土と成ると定め、向ふ先は面も振らず切つて通れと諸軍勢に下知をなし、明くれは水無月十八日と申すま

だ東雲計りに肥前方惣陣一度に閧をどつと揚げ、野々の陣に押寄する、先手の大將隈部左馬之介親與と名乗、二千餘騎にて大手の口に押寄する、薩摩方先手の大將稲留左京猿渡肥前守一千餘騎を引いて、肥前方大勢の中へ驀地に切つて入り、追ひつ追はれつ請けつ流しつ三度の太刀打四度の追込、五度の戰ひ六度の合戰、七八度目には鎬を削り鍔を割り、切羽の金も末塵に成れと、世にも烈しく爰を先度と戰ひしが、隈部左馬之介を初め、向ふ敵一千餘騎は討取たり、去れど又稲留左京猿渡右京其外三百餘騎は、つまりつまりに討死す、未だ惜しかる稲留は二十六、猿渡三十一と聞へける、玆に又、川田駿河守は兼て聞えし

兵道者なれば、清水谷に下り夜の間に、七度の水を浴び天に向つて秘法を行ひ給へば、源氏の氏神正八幡、諏訪稲荷祇園春日の五社の神より、此度の合戰は肥前は亡び、薩摩は勝軍に疑なしと御託宣あれば中務殿此由聞召され斜に悦び、最早此由陣屋〳〵に觸れさせ給へば、之を勢に島津主右衛門尉輝久は、一千餘騎を引き野首の陣より一つ具を相圖として切て出で前肥前方小川武藏守が大勢におろし合せ、爰も先度と戰ひしが、向ふ敵一千餘騎は打取、陣所さして引て行く、其勢に加治木彈正は三千餘騎にて大手の口より切つて出れば、肥前方寺山陸奥守が勢におろし合せ、大勢の中に割つて入り、群る敵を弓手妻手

に打捨て當るを幸ひ其處引くなと言ふ儘に、陣を先度と戰ひ給へば、又も向ふ敵二千五百餘騎は打取り、陣屋をさして引退く、茲に又、平田和州、村田狩之介二千五百餘騎引いて、島原口より討て出で、肥前方繩口の大勢におろし合せ、面も振らず火花を散して戰びしが、又も向ふ敵一千餘騎は打取、陣所さして急ぎ行く、是は偖置き茲に又、島津中務殿は軍は今と心得、嫡子又七殿を御側に召され、如何に又七、唐土の虎は一日に千里を馳せて駈け戻り、一身を捨て、毛を惜しむ、夫れ日本の武士は幼き時より武藝を盡し名を末代に殘し置く、人は一代名は末代と申す、必ず跡に殘りて未練致すな、名家の耻辱家の恥と

云ふより早く、東の方山の手口に馳廻り、肥前方大勢の中に横合より打て掛り、頓て大音揚て如何に旁々、某を如何なる者とや思ふらん、薩摩に於て島津中務とは某なり、手並の程を手本にせよと、云ふより早く二尺八寸の大太刀を拔持つて、大勢の中に割つて入り、眞向立割車切、當るを幸ひ、其處引くなと言ふ儘に、追ひつ捲りつ受けつ流しつ西より東蜘手搔繩、十文字八つ華形と言ふ儘は、縱横無盡に切立れば四方にさつと小路を明け、又も向ふ敵三千五百餘騎は打取つて、陣所をさして引退く、是は扨置き茲に又、川上左京久堅は軍は今が華と心得て、我手三百餘騎を取構へ、桑原の陣に控へけるが、窃に寺山が

死したる旗を奪ひ取り、肥前の軍衆の様を替へ、敵陣の中をあなた此方と廻られ給ふが、鍋島に行逢ひ、いかに鍋島殿、某は士の未練なから只今中務殿の横入に目がくれて我君隆信公の御旗本を確と忘れ候ひしが、敎へ給へ、と涙と共に有ければ、鍋島は此大荒敵を味方の勢と心得て、我が君隆信公は彼方に見へし小松原を北に廻る、本丸の陣へ三十六騎を御前に召れ床机に腰を掛け、母衣武者にておはします、急ぎ參られよと敎へける、左京斜に悅び、鍋島が敎の通り本丸の陣に攻登り、今は手の内と心得て、其日の裝束を改め、いかに申さぬ隆信殿某を如何なる者とや思ふらん、薩摩に於て島津義久の郎等川上左京久

堅とは某なり、此度赤星が兄弟の子供の恨の太刀を請て給見へと、大音揚げて申しける、隆信殿は大に驚き、扨は中々川上は薩摩に於て家ある武士か、又は家なき武士か、目下に廻れと有りければ、川上殿はから〳〵と打笑ひ偖は中々思ひも寄らぬ仰かな、士が士を打つに目下目上の差別なしと言ふ儘に、三尺八寸の大太刀を拔持つて、隆信の弓手の袈裟掛水もたまらず打落す、御側の士三十六騎は此由見るより主を討せて叶ふまじと切て掛れば、川上殿は隆信を討たる勢ひに、世にも烈しく爰を先途と戰へ御痛はしや三十六騎も一つ枕に只やみ〳〵と討ち伏らる、隆信の年を申せば五十一、頓て隆信の首を太刀の先に貫

きて、小松原の本陣を心靜かに引て行く、頓て小松原にも成ぬれば、鍋島丹州添島右衛門、彼二大將の者共、此由を一目見るより扨ては中々あれを見よ、薩摩軍衆が何時の間に奥の陣にもれたるか、主は討る手勢は持たず、我が君の敵、何國迄も落行ぞ、逃すまじと言ふより早く切て掛れば、川上殿心得たりと言ふ儘に、向ふたる先は只一筋に切通れと、士卒に下知をなし、寄來る敵は群て、追つ捲りつ受つ流しつ爰を先途と戰へば、向ふ敵數多討取、仕すましたりと味方の陣に引て行く、頓て隆信の印を實檢に供へければ、中務殿心得たりと小高き所に馳上り、大音揚て肥前の大將龍造寺山城守隆信を、川上左京久堅が

打取つたりと呼はりて、勝鬨を三度どつと揚げ給へば、薩摩軍衆は是を襲ひ、三ケ國の勢は一手に成りて、肥前方落行勢に掛合せ、弓鐵砲を放ち掛呼き叫んで戰ひければ、痛はしや肥前軍衆は、秋の田の水にはあらねどもつまり〳〵に、切つて落さるゝ者は數知れず、斯る處に島津又七殿は鍋島が落行く所を目に掛け、駒を早めて、いかに申さん鍋島殿、何國迄落給ふぞ、斯く申す某は薩に於て島津家久が嫡子、島津又七とは某なり、今年歳は十三歳、軍は今日が初なり、此度の合戰に打死致す者也、我れを討取て高名せよと大音揚げて呼はりければ、鍋島も落行駒の手綱を引返し、大將は打れ手勢はなく何の力で軍致さん